岩波講座 日本歴史

南蠻文學

新村出

國史研究會編輯　岩波講座　日本歴史

南蠻文學

新村出

岩波書店

南蠻文學

新村出

目次

序説

こゝに謂ゆる南蠻文學といふ言葉で以て、私は天文末歐人初渡以來凡そ一世紀にわたつて南蠻人が此國に齎らした西洋文學とその翻譯、並びに其等の新渡文學に動かされて我國文學の上に萌芽を示した新要素とを取扱ひ併せて異國（エキゾ）趣味（ティスム）の文學にも觸れてみたい。從つて其範圍は南蠻文學の根源とも云ふべき吉利支丹宗教文學卽ち耶蘇教の教義、信仰、修養に關するものや聖徒殉教者傳を記した文學を主として、その副産物とも云ふべき、吉利支丹の手に成つた教外文學を含み、又彼等が編纂した內外文典辭書類からその資料を引用することもあり、更に反吉利支丹文學とも云ふべき排耶書類に係はることもあらう。

嘗て私は舊著に南蠻記なる書名を選んで以來、度々この言葉を私の著書に題して愛着してゐる。その語の由來の古くその響きの豊かなるを好むためである。元來南蠻なる語は古典の上では孟子に見ゆる南蠻鴃舌の人云々が最も古く、主として南方の蠻族を指したもので、かの後漢書に至つて始めて南蠻傳が正史のうちに立てられた。我國の文獻では平安朝中期より史上に散見することは嘗て私の「日本と南國との關係」に錄したごとくである。日本紀略一條天皇長德三年の條に見ゆる「南蠻亂入」は高麗人であつたらしく、足利時代の辭書類にも南蠻の文字は見えるが古語の採錄

で當用の義を有しない。糸亂記にある應永頃の堺港に於る「呉越三韓南蠻」の船、南浦文集鐵炮記に新渡の葡人を指した「西南蠻種の賈胡」の文句は共に後年の追記であつて、西人渡日の初期には天竺又は天竺人と呼んでゐたことは天文廿年（一五五一）の大内義隆記や同年のフランシスコ・シャビエル Francisco Xavier の書簡によつて明かである。翌廿一年の周防介の造寺免許狀には西域來朝之僧とある。信長記の「唐土高麗南蠻之舟」、大友記の「南蠻國ヨリキリシタント云宗旨ワタリテ」、大内記の「唐土天竺高麗ノ舟」などは何れも歐人を南蠻天竺と呼んだ文獻のうち古いものであらう。天正四年（一五七六）京洛に建立された吉利支丹寺院を南蠻寺と呼んだ例もあるが是も後年の文學的命名であらう。寛永に入ると古俳書類に南蠻人南蠻舟の新取材がみえる。後れて正德五年（一七一五）の新井白石の西洋紀聞の始には潜入外人シローテ（シドッチ）が彼自身を指して「ロウマ、ナンバン、ロクソン」云々と云つた由錄してゐて、當時尚歐人自ら南蠻なる語彙を知つてゐたことが判る。享和元年（一八〇一）志筑柳圃譯の鎖國論には「我國の所謂南蠻人は伊斯波泥亞人、波爾杜瓦爾人を云へり、和蘭人をば紅毛人とこそ云へれ」とある。

かういふ變遷が南蠻の語義にあつたが、德川期に入るとこの言葉は十六世紀中葉から來朝した西葡伊人及び彼等の將來した文化文物の總括的な名稱となり、南蠻紅毛と對照せられて禁教後和蘭人の齎らした文物と區別せられた。しかし近頃坊間によく用ゐられる南蠻ものといふ語はこの二つを一括した意味である。本稿に私の指す南蠻は狹い意味のそれであつて、從つて禁教後の紅毛文學は之を省く。

南蠻文學の主潮とも云ふべき吉利支丹宗教文學を一瞥するならば、文祿初めから慶長末にかけて刊行された各種の

版本のうちに、吉利支丹教義書（ドチリイナ、キリシタン）がある。これは教義の解明の爲には最も重要なる宗門書であつたから耶蘇會印刷所創立の翌年にあたる文祿元年（一五九二）には、早くも天草にてローマ字綴本が出版せられ其後國字本二種ローマ字本二種合計四種が印行されたらしく、それら四種の異本が現存してゐる。修養書としては、當時廣く歐洲で愛讀せられたトマス・ア・ケムピス Thomas à Kempis の名著、De Imitatione Christi 卽ち基督の模倣の抄譯が行はれたり、スペインの高僧ルイス・デ・グラナダ Luis de Granada の Guia do Pecador「ぎや・ど・ぺかどる」が譯述されたりしてゐる。「サントスの御作業」といふ題で基教の聖徒殉教者を記錄した譯書は現存吉利支丹版の刊年の最も古いもので、其他「サルヴトール・ムンヂ」（救生主）や、「ひですの導師」一名「信心錄」の譯編などあるが、いづれも教義の解明なり信心の手引なり修養の手ほどきを示したものである。此等の刊本と共に、教義を筆錄した寫本類も多少殘つてゐる。是等宗門書の刊行に伴つて、內外教徒の爲の語學書も編纂印行された。アルヴレス Alvarez 式拉丁文典やカレピヌス Calepinus 式拉葡日對譯辭書や日葡辭典やロドリゲース Rodriguez の日本文典などである。尙「落葉集」といふ邦字字書が新來の洋式印刷に附せられるやうな辭書史上に特筆すべき現象もあつた。此等の語學書は當時の我國に於る幼稚な下學集・節用集類に比して其組織の精緻にして學問的なることが著しく目につく。かゝる語學書の具備と共に、彼等は又教外文學からも其材料を選んで是を印刷した。文祿のローマ字綴平家物語・伊曾保物語・金句集、慶長中期の國字本太平記拔書等これである。慶長十五年の拉丁文「聖教精華」は「金句集」が東洋古典からの拔萃であるに對し此は西洋の聖語金句を聚めたもので、尙昭和五年には吉利支丹版の和漢朗詠集がスペイン國王離宮エスコリヤルの一祕庫から木村毅氏によつて發見されるやうな喜ぶべき事もあつた。

此等の南蠻文學に用ゐられた用字用語發音に就て一言すると、現在吉利支丹版のローマ字綴本と國字本とは同數位である。彼等外人宣教師たちは其等の譯編書をローマ字で綴るのが便利であると考へて居たことは西教史上に有名な學僧ワリニャーニ Valignani の天正十一年(一五八三)アクヮヴィヴ宛書翰にも表はれてゐて、その文中に、日本の少年達に讀書を教へる場合、日本文字は數多くて印字製造至難であるから洋字活字を以て日本語を印刷すると云つてゐる。卽ちローマ字を多く用ゐたのは、外人教師に邦語發言を理解せしめ邦人教徒には洋字洋語を學習せしむる爲であつたが一面邦字活字鑄造の困難といふ障碍もあつたからである。しかしそのローマ字採用は現今のローマ字問題を想ふ時すこぶる進歩的な態度であつたと云へる。ローマ字本から遲れて印刷された國字本の漢字交り平假名の活字は嵯峨本に見るやうな端麗な字體で、洋語もそのまゝ譯さずに假名で寫してゐる。用語に就て云ふと、教義書は弘道傳布を主旨とするのであるから平易通俗な當時の文語を主として用ゐ、その語彙、用ゐぶり、文脈は中世の佛教物語戰記類に類似する點も少くない。吉利支丹の宗教語が佛典語を藉りて譯されてゐるとともに、吉利支丹に特有な宗教觀念、神學思想を含む言葉は譯さずに原語のまゝ使つてその內容の異教化することを避ける一面、その特殊語に對する讀者の注意を引くごとき新工夫も用ゐてゐる。平家・伊曾保物語の如き教外書には俗語口語を用ゐてゐる。慶長十年の「サカラメント提要」や聖教精華の如く原語で記したものもある。ローマ字綴本には寫音法の嚴密な規則が行はれてゐた爲、今日なほ當時の發音を知ることが出來、「母(はわ)」、「父母(ぶも)」、「一心不亂(いっしんぶらん)」の如き現行發音との差、「進退(しんだい)」、「養子(やうし)」、「雜談(ざうたん)」とよむごとき清濁の變遷を明かにし、又半濁音符を新製使用する等の進歩もあつて、國語音の研究に資すること大なるものがある。

此等吉利支丹文學書は幸にも度重なる禁壓の厄を逃れ得たもので何れも内外の祕庫に數本を數へる天下の稀覯書であるが、他にもその書名のみ知られる吉利支丹古佚書が少く無い。今もし禁教の事なく鎖國の世とならずして、歐人との交渉が續いたとするならば、西洋文學南蠻文學と我が國文學との關係はどのやうな樣相を示したであらうか。

西葡伊人ら謂ゆる南蠻人の後に來た紅毛蘭人はその性情の然らしむる所、藝術的才能に於てよりも寧ろ實利實益の方面に秀でてゐた爲か、或は幕府の宗教政策が紅毛人に宗教文學の類を移入する餘地を與へなかつた爲か、蘭人を通じての西洋文學の輸入は幕末期までは殆ど見ることが出來ない。文獻の上では天和二年（一六八二）和蘭甲比丹が元祿におけるケンペルの例のやうに江戸城中で小公子の餘興に阿蘭陀歌舞を強ひられて其譯詩が遺つてゐたり、蘭學の祖青木昆陽が延享二年和蘭陀勸酒歌を吉宗公に上つたり、安永八年前野蘭化が家治の命に由つて拉丁文西洋畫贊を譯したりした例は見えるが、いづれも文學的挿話の價値しか持たぬ。しかし明和八年から安永三年まで滿三年以上を要した解體新書や文化初年から天保八年まで前後三十年を費したハルマ蘭日辭書の譯編こそは、例へ吉利支丹語學書譯書の精緻と廣範に比することは出來ぬとしても、その苦心、その精勵はわが國飜譯史上に忘るべからざるものがある。

同じ歐北に屬する英國との通商關係は慶長十八年（一六一三）から元和九年（一六二三）まで僅か十年間にして平戸商館の閉鎖と共に終つたから、其間、萬一わが國へ渡つた英人のうちに沙翁が故國に於る晩年の名聲を聞きその名劇を觀た者があつたとしても、この短い期間に何かの英文學資料を遺してくれたとは思ひも寄らぬ。沙翁の名は二世紀も後、天保十二年（一八四一）の澁川六藏編「英文鑑」に至つて始めて見える。「基督の模倣」と共に宗教文學の

雄篇としてその名を連想するミルトンの「失樂園」が出たのは十七世紀も中葉以後であつて、英人との交通を絶つて早や半世紀を經、バンヤンの「天路遍歴」は更に遲れる。一七二六年に出たスゥィフトの「ガリヴァ旅行記」には日本を不死の國ラグナグの同盟國として紹介するやうな奇拔な記事があるが、五十年を經て安永三年に出た和莊兵衛の異國奇譚がガリヴァの翻案だといふ説はあつても、何等直接に日英文學の交流の證跡を指示することも出來ぬ。スゥィフトと併び稱せられたデフォーのロビンソン漂流記の邦譯に至つては、原著の初刊の一七一九年から一世紀半も下つて幕末のころであり、然も蘭譯を通じての重譯であつた。

蘭英文學との交渉の殆ど見るものが無いに比べると、吉利支丹文化南蠻文學が我が國文化史文學史の上に遺した足蹟は可なり廣く深いのを覺えるが、その業績、影響、價値については後章に於て備れてゆくことにする。

一

吉利支丹版、即ち日本に於る耶蘇會學林の印刷所から發行された諸刊本についての研究は、サトゥ卿 Sir Ernest Satow が我が國學者に先だつて着手したことは世に知られてゐる。サトゥ卿は始め日本の風物に憧憬を覺えて文久二年一外交官として來朝したが、明治十六年我國を去るまで前後廿年の外交官生活の間に、日本語研究から進んで日本印刷史書史の考究にまで及んだ。最初サトゥ卿は日本の活字印刷が朝鮮よりの輸入と考へてゐたが、後には歐洲よりの輸入の行はれた形跡を發見し、日本を辭した後、英國其他歐洲各地の秘庫を探訪して日本耶蘇會版十四部の存在を

知るに至つた。其等を解題した「日本耶蘇會版書志」The Jesuit Mission Press in Japan は明治廿一年百部限定私版を以て刊行せられ、後に之が增補も行はれた。尤も幕末明初における基督舊教の復活時代に、新渡の佛人宣教師らによつて九州邊の潜伏信徒間に傳はつた舊刊本寫本口傳類の研究や翻刻が行はれたし、又我國側でも、明治以前、寶永年間に於る新井白石の海外事情や吉利支丹の研究があり、文化年間には大槻磐水が支倉六右衛門の遺品を考査した「金城秘韞」の如き著も見え、寛政年間には水戸藩儒士立原翠軒の吉利支丹法器に關する著名な研究も表れ、明治以後も十年には大槻如電翁の「日本洋學年表」、十一年には「日本西教史」、十七年には北澤正誠らの「外交志稿」等の刊行があつたが、我國に於る吉利支丹研究はサトウ卿の名著によつて大なる刺激を與へられたことは爭はれぬ。この著を先驅として明治廿年以後には日歐交渉史吉利支丹文化史についての各種の研究發表が陸續行はるゝに至つた事は拙著「薩道先生景仰錄」に詳說した如くである。

吉利支丹教義書修養書などの翻譯やその抄出本は、印刷機輸入以前からも古く行はれた。天文十八年（一五四九）八月聖母昇天祭日、鹿兒島に上陸したシャビエルに随つて歸國した彌次郎（アンジロウ）、教名パウロ・デ・サンタ・フエはゴアのサンタ・フエ寺院の學林で拉・葡・西語を學び、來朝の前年ゴアに在る間に馬太傳福音書を譯出し、其他にも「吉利支丹信心錄」、「聖福音の日本に渡る事」、「宇宙の創造」、「信心の極意」等も作つたと云はれる。シャビエル自身にも滯日中に問答書（カテキズム）の著があり、シャビエルと同行したフェルナンデスにも教典の譯述や日葡字書の編纂があり、度島會堂燒失の際に最も惜まれたのは彼の邦譯した宗教書であつたといふ。一五五二年渡日のガゴーには天文二十三年自著

の排佛書を大伴宗麟に獻じたやうな事蹟があり、シルヴァには日本文典日葡辭典著述のやうな事業があつた。布教の初期における此等の譯著は何れも今は佚してしまつたが、後年刊本にまとめらるべき吉利支丹文學資料は邦語に巧みな此等外人宣教師の手に依つて徐々に出來上りつゝあつたと考へられる。尚、有名な「日本史」の編者ルイス・フロイス Luis Frois は天正八年（一五八〇）織田信長に再謁するソリニャーニの通譯をつとめた經歴もある程語學に秀でた者であつたし、「信心錄」の譯者緒言に記名したペトロ・ラーモン Pedro Ramon は在日卅四年、自作學林の學監を勤めたこともあり、更にロドリゲースに至つては慶長九—十三年（一六〇四—一六〇八）にわたつて苦心經營、かの「日本文典」を完成した著名な語學者であつた。

此等語學に優れた南蠻伴天連の譯述事業を助けた邦人教徒のうちでもヨーホー軒パウロと其子法印ビセンテは有力な吉利支丹文學者であつた。父パウロは一五一〇年頃若狹に生れた醫師で歸教後外人教師を援けて日本の宗教や古史に通ぜる豐富な學識を傾けて教義書・聖人傳・語學書の譯述に携はり、子ビセンテも亦和漢の學に通じ特に禪學に精しく說教に秀で、父と共に多くの譯業に加はつたと云ふ。後年には、かつて私が天草本「平家」の編者、「妙貞問答」「破提宇子」の著者として考證した不干ハビアンの如き文才ある協力者も居た。かの天正使節のうちの原マルチノが語學に長じてゴア滯在中に拉丁語の演說をなし、歸朝後「こんてむつすむんぢ」即ち「基督の模倣」の印行に力を盡したこと、中浦ヂュリアンも之に係つたことは、濱田耕作博士がグワルチェーリの「使節記」に據つて書かれた「天正遣歐使節記」の一節に見えてゐる。

かう云ふ内外教徒の協力に依つて翻譯編述の業は進捗したが、宗門の興隆、布教範圍の擴大と共に、出來上つた譯

書類を印刷頒布する必要が起つて來た。天文末から四十年を經た天正十八年に於る活字印刷機の輸入はこの要求に應じたものである。

活版印刷術傳來の考證は私も嘗て「南蠻記」に揭げておいたから詳細はそれに讓る。

耶蘇會巡察使ソリニャーニが活字印刷機を携へて三度目の來朝をしたのは天正十八年七月（一五九〇）であつた。西國諸侯の門にも出入し信長・秀吉にも謁したことのある彼は、單なる布教者たるに止らずして西洋文化の傳達者として活動し、有馬・府內・安土の諸學林を建て洋式教育を創め、九州小公子達の歐洲留學をも實現したが、更に彼の宿望であつた印刷機と印字とを輸入することに由つて、我國文化史上に不朽の功績を遺すに至つた。彼は歸朝途上の九州使節と共に臥亞に居る間に、我國へ將來したと同じ印刷機に由つて、「吉利支丹青年訓」と共にサンデ Sande 著「日本使節羅馬法皇王廷派遣並に歐羅巴及全路程見聞對話錄」（濱田博士校閱の譯本が續刊しつゝある）を拉丁語文で印刷したが日本文の方は佚してしまひ拉丁書のみが數部殘つてゐる。新來の活字印刷機は九州島原の加津佐學林に備付られ、翌天正十九年には早くも「サントスの御作業」が印行され、續いて機械は天草學林から長崎學林へ移されて、爾後、文祿・慶長に至る二十年間に各種吉利支丹版が發行さるゝに至つた。

此等日本耶蘇會版の現存せるもの約二十四種について見るに、用字から分つとローマ字綴本十五種、國字本九種、用語から分つと文語文十五種、口語文二種、口語文語併用のもの一種、各國語併用のもの六種、發行所から云ふと加津佐一種、天草七種、長崎六種、京都一種、刊地無記のもの九種である。刊行者の名を明記したもの二種、京都版「こ

んてむつすむんぢ」の原田アントニオ、長崎版「どちりなきりしたん」の後藤宗印。內容から別けると教門書十三種、教外文學書六種、語學書五種。そのうち海外に有るもの十五種、我國に存するもの九種。廿四種のうちの中に以上は天下の孤本であつて、最も多く現存する「ぎやどぺかどる」ですら完本二部、零本五部を數ふるに過ぎぬ。古くサトウ卿が解題した時は十六種に過ぎなかつたが、其後發見されたもの、發見を傳聞するもの、歐洲古書店の目錄に著錄されたもの等八種に上つたが、幸ひ我國に存在せるものはローマ字綴本九種、國字本四種である。その內、水戶德川公爵家藏の「吉利子丹教義（ドチリイナ・キリシタン）」と故內野皎亭氏藏の「太平記拔書」とは明治以前より我國に存したもの、林若吉氏藏の「こんてむつす・むんぢ」は大正以後國內で發見せられ、其他は何れも明治以後海外より回收されたものである。殊に伊藤長藏氏藏の「異本どちりな・きりしたん」と丸善書店藏の「ぎや・ど・ぺかどる」は近年の回收にかゝる。此外、慶長三年版「落葉集」は一部我國にも存したがサトウ卿の手に由つて發見され大英博物館へ寄贈されたことと、近年九州五島發見の慶長九年版「こんちりさん」と題する新資料が舊信者の手からローマ法皇へ獻上されたといふ傳聞は惜しむべきである。

今廿四種を宗門書、教外文學、語學書の別によつて其書目を記して置く。

一、教義書

(書名)	(卷冊)	(刊年)	(刊地)	(用語)	(用字)	(原本所在)
サントスの御作業	二卷一册	一五九一 天正一九	加津佐	文語	ローマ字	牛津ボードレアン文庫

二、教外文字

ドチリイナ・キリシタン	一冊	一五九二 文祿元	天草	文語	ローマ字	東洋文庫
信心錄	一冊	一五九二 文祿元	天草	文語	ローマ字	ライデン大學
コンテムツス・ムンヂ	四巻一冊	一五九六 慶長元	天草？	文語	ローマ字	ボドレアン文庫
どちりいな・きりしたん	一冊			文語	國字	羅馬バルベリニ文庫
異本どちりな・きりしたん	一冊			文語	國字	武藤長藏氏
サルヴァトール・ムンヂ	一冊	一五九八 慶長三	長崎？	文語	國字	羅馬カサナテンゼ文庫
ぎや・ど・ぺかどる	二巻二冊	一五九九 慶長四	長崎？	文語	國字	大英博物館 巴里國民文庫 バルベリニ文庫(殊簡) エスコリヤル・サンロレンソ文庫 丸善書店 飛驒某寺新發見(行方不明)
ドチリイナ・キリシタン	一冊	一六〇〇 慶長五	長崎？	文語	ローマ字	前ボルトガル王舊藏 水戸德川家
どちりな・きりしたん	一冊	一六〇〇 慶長五	長崎(後藤宗印)	文語	國字	羅馬カサナテンゼ文庫
セルケイラ編サカラメント提要	一冊	一六〇五 慶長十	長崎	拉丁	ローマ字	東洋文庫 大英博物館
スピリツアル修業鈔	二冊	一六〇七 慶長十二	長崎	文語	ローマ字	大浦天主堂
こんてむつす・むんぢ	四巻一冊	一六一〇 慶長十五	京都(原田アントニヨ)	文語	國字	林若吉氏

ハビアン編 平家物語	四巻（二巻と合せて一冊）	一五九二 文祿元	天草	日語	ローマ字	大英博物館
伊曾保物語	二巻（四巻と合せて一冊）	一五九三 文祿二	天草	日語	ローマ字	大英博物館
金句集		一五九三 文祿二	天草	文語 口語	ローマ字	大英博物館
太平記抜書	六巻六冊		長崎 ?	文語	國字	故内野皎亭氏
倭漢朗詠集		一六〇〇 慶長五			國字	サンロレンソ文庫
バレト編 聖教精華	一冊	一六一〇 慶長十五	長崎	拉丁	ローマ字	東洋文庫

三、語學書

アルヴァレス 拉丁文典	三巻一冊	一五九四 文祿三	天草	拉、葡、日	ローマ字	羅馬アンヂェリカ文庫
拉葡日對譯辭書	一冊	一五九五 文祿四	天草	拉、葡、日	ローマ字	ボドレアン文庫 佛國學士院文庫 ライデン大學
落葉集	一冊	一五九八 慶長三	長崎 ?	文語	國字	大英博物館 ライデン大學
日葡辭書	一冊	一六〇三 慶長八	長崎	口語 葡語	ローマ字	ボドレアン文庫 大英博物館 巴里國民文庫
ロドリゲース編 日本語典	三巻一冊	一六〇四－一六〇八 慶長九－十三	長崎	口語 文語 葡語	ローマ字	ボドレアン文庫 アジユダ文庫

この外に、岡本良知氏は「書誌」第四冊（大正十五年七月）に於て伯林パウル・ゴットシャルク書店目錄に依つて慶長十六年長崎版後藤宗印刊行の「ひですの經」の紹介をせられたが、今現本の所在は米國に渡つたときく以外明かでない。尙この外に、今は佚書となつてゐるが嘗て存在したと推考される吉利支丹版がある。岡本氏譯フレイタス著「十六世紀末澳門及び日本に於る活字出版」には下記の如き吉利支丹版を錄するが今は其存否を詳かにしない。文祿元年（一五九二）には、「日本公教問答」、「日本使節紀行」を附錄したボニファシォの「正しき幼童教育」、「チチェーロ演舌文集」其他。慶長元年（一五九六）には、拉丁文「トリエント宗教會議公教問答」、ラテン文のイナショ・ロヨラの「默想錄」、ラテン文及び日本文の「コンテントゥース・ムンディー」。此他、歐洲文字でサン・ベルナールの「默想錄」附き「內部の書」、ウィルジリゥスの書一冊、「全祈禱書」、「ロザリオ十五祕義」等。又、前揭の語學書中に引用された吉利支丹版佚書と想像されるものが十二種ある。現存本約そ廿四種にフレイタス論文中の十種以上、語學書引用の分十種以上を加へると當時の吉利支丹版は少くとも五十種以上もあつたと推定される。此の印刷事業が始まつた時は既に吉利支丹禁壓の手が擴げられてゐたにも拘らず、內面的には却つて敎徒の思想信仰の奧底に滲透するやうな有力な布教機關を活躍させてゐたのである。序ながら海外に於る耶蘇會が刊行した書も數種ある。元和元年（一六二〇）マカオ刊、ロドリゲース編「日本小文典」。寬永七年（一六三〇）マニラ版、スペイン譯「長崎版日葡辭典」等である。マニラに殘つてゐるロザリヨ經書二種については石田幹之助氏が雜誌「民族」（大正十四年十一月）に紹介された。ドミニコ派のコリヤド Collado が寬永九年（一六三二）ローマで刊行した「懺悔錄」もある。

吉利支丹の教理を解き、信仰の手引修養の勸めを示し、聖者殉教者の事蹟を傳へた謂ゆる吉利支丹版宗門書のうち代表的なもの四五に附て述べよう。

二

「サントスの御作業」は現存刊本中最も古く、サトウ卿の書志の外に村岡典嗣氏が「吉利支丹文學抄」中に一部の翻字を試みられ、姉崎博士も亦、「切支丹宗教文學」中に村岡氏飜字以外の部分に手を着けられた。初期刊本に共通のローマ字綴りで、未だ日本活字が整はなかつたのと、又邦語に未熟な外人教師に邦語を敎へ、邦人教徒に洋字を授ける爲であつたらう。卷數二、章數三十九、頁數七百七十頁あまり、致命者聖者の行蹟を記した部分と殉教の觀念等を述べた部分とから成る。一つの成書からの譯出でなく當時行はれた聖徒傳殉教物語からの自由な抄譯であらう。卷二の奥書に、「このいすとりや（Historia）、ぜねじす（Genesis 創世記）の語文より翻譯せしむるもの也。題號本には和げずと云へども少しもその義理を違へずその心をとつて書寫せしむるもの也」とある。この譯述の態度方針は後にまで繼承された。全章のうち卅五章は前述した法印ビセンテ、四章はヨーホー靳・パウロ（やうはうけん＝養方軒か）の譯である。書中に擧げられた聖者中には十二使徒以外に、名高いアッシジの聖フランシスコもあり、釋尊傳の基教化として知られた聖ジョサハツもある。ローマ、エヂプトの美女、武人の致命者も交る。水戸德川家藏寫本中に三十枚ほどの聖者傳があつて「サントスの御作業」中のサント・アレイショ・コンヘソルの話と一致し、この寫本の奥書に

元和四年と南部壽庵と下野國云々の記入があるから、本書刊行の三十年後にも流布してゐたことが知られる。因みに後藤壽庵が元和七年奥羽の信徒からパウロ五世に獻じた答禮中にみえる伊達藩士とすれば、その讀書層も察せられる。

私たちの文學的興味を引くのは、サンタ・エウゼニヤ・ビルゼンの話で、都城の花と讃へられた美しい少女が男裝して教門に入る筋は往年故芥川龍之介が吉利支丹版の假作問題でさわがれた「奉教人の死」の一節を髣髴させる。

サン・バルラアンとサン・ヂョサハツの御作業のヂョサハツは菩薩の轉化であるが故上田柳村博士は古く「菩薩物語由來」（上田敏全集六巻）にこの佛陀傳説の西漸と基教化の經路を考證された。博士は西紀六百年頃に出來たこの傳説が中世の聖者傳や黄金傳説集に載せられたり、ロペ・デ・ヱガ（後出）の劇「バルラン・イ・ホサファ」やカルデロンの「この世は夢」に採られたり、近くはトルストイの「告白」の中にまで現れてゐることを指摘し、この傳説と印度の「五部書」や伊曾保傳説との關係にも觸れ、今なほ伊太利パレルモのジョサファット寺には佛教の始祖が基教の聖者として拜せられてゐることを記された。かういふ東西の宗教、文學に廣汎な交渉をもつ興味ふかい傳説が最古の吉利支丹版に見えるのも因縁である。その章の始めの一節をあげよう。

諸國におん教榮え給ひ、數々のエケレジヤ（Ecclesia. 教會）を建て、又は世を捨つる山居の道心者れき〳〵ありし時代、インヂアのアヱニルと申す帝、富貴榮耀世に勝れ、殊更御形人に超え給ひしかば、現世の事のみ樂み給ふといへども、御位をゆづり給ふべき王子御一人も在まさねばこれのみ深く歎かせ給ふ也。

かういふ物語風な筆致、調雅な文體で傳説が進められる。やがて太子が生れて成長ののち、

或時の行幸に、頭に雪霜を頂き、面にしわたゝみ、齒は皆落ちて口ゆがみ、腰かゞみ聲ふるひ幽かに物言ふ老翁

あり。さても不思議なる者かなと打眺め給ひ、あれは何ぞと問ひ給ふ。おんめのと答へて申さく、この世に久しく長らへ、年月の積りたるが斯くなりけると申しければ、終には何とかならんと問ひ給ふ。答へて申さく、時剋といふ期來りて空しくなりけると申しければ、重ね〳〵その期といふ事は人毎に來るものかと問給ふ。

ローマ字綴を國字に改めて讀むと殆ど歐文臭を感じない、こなれた譯し振りで本朝の佛教物語でも見る氣持がする。吉利支丹文學者の中には佛僧出が多く叉布教の手段として佛教を利用したことの反映は史實の上にも文學の上にも至る處に見える。和文脈の例をもう一節、ヨーホー軒パウロの譯したサント・アレイショの條から引用しよう。

自らが子をみる爲に、皆そこ退いて道をあけられよと　群集の中を分けゆき給ひ、おん死骸に抱きつき、あら悲しや、なう悲しや、これは夢かうつゝかと聞えこがれ給ふ所に、（中略）涙にむせびて宣ふは、自ら別れ申してよりは、つがひの離れたる山鳩のごとく、たゞ獨り居て待ち申したるそのかひもなくなり給ふを以て、今より後は誰の身の消えたきより外の事なければ、我をもはや同じ道に召しつれ給へとサビイナも亦棺にすがり泣き給へば、御父母とおん三人はおん死骸にとりついて離れ給はず。

しかし、本書のうちでも吉利支丹教義の思想的記述に觸れた部分になると、當代の日本文學には見ることの出來ぬ引きしまつた、歐文脈の、異色ある文を作してゐる。サンタ・オラリヤといふ童貞女の殉教を讃した章の一節を抜いておく。

たとひ天魔破旬は新たに現前して障りをなすとも、甘露のゼススと我が中をはさけ奉ることと叶ふべからず。色身をば汝の手に渡し、アニマ（Anima・靈魂）のヲンタアデ（Vontade 意志）はゼススの御手に捧げ奉れば、再び改

易すべからず。其に依て佛神に惡口することも止むべからず。又惡王も汝も皆果報つたなき者と、我れ憐む也、天魔破旬、色身など佛教語を援用しながら、しかも教義の根本觀念を述べる場合には、佛神に惡口することも止むべからずと敍してゐる。天魔破旬は The Demon. 甘露のゼスス The sweet father にあたる譯語である。次に遠西の形而上學的な思索を移植した第二十五章の一節を左に揭げておかう。

然れば、ヒロゾホの語にも、人は新しき事を見て驚き、その由緒を知らんと歎くこと常の法なりと云へり。譬へば日月の蝕するを見てはその謂はれを知らんと歎くより、ヒロゾハルといふ事は出で來たる也。此を以てその根元を知るもの也。

ヒロゾホは Philosopho 哲學者であるが、ヒロゾハル Philosophar といふ動詞形が用ゐられてゐるのは近來よく用ゐられる哲學するといふ用ゐざまの先鞭をつけてゐるもので注意すべき用法である。「人は新しき事を見て驚き」それを研めんとするのが哲學の根元だといふやうな新しい觀念と、あたらしい文章の表現法が三百年前に行はれてゐたのである。其他、「智慧の源なるメルクリヨ」(Mercurio. マーキュリ)、アポロ (Apolo)、ジュピテル (Jupiter)、ヱヌス (Venus) 等希臘神話の神々の名が出て來る。「されども女なればレトウリカの辨舌はあるべしとも心得ず」(Rhetorica. 修辭學) といふ語も用ゐられてゐるが、この語を「契利斯督記」(後出) には、「レトリカは、談義にあたる學文にて、デウスの御言葉をすゝめん言葉」と記してゐる。又、和漢の故用を藉りた所もあり、印度のビドパイ譬喩談から出て歐洲へも傳はつた一角獸即ち「うにこうる」の話などの動物寓話も見え、村岡氏の呼ばれたやうに吉利支丹今昔物語たるにふさはしい話材の豐富さである。文章用語も後出の吉利支丹文學の基準となつたとおもはれる。

「サントスの御作業」の翌年に出た吉利支丹教義書(國字本には、どちりいなきりしたんと記す)は、教義の根本觀念を示す重要なものであつたから數種發行されたらしく、四種の異版、即ち、ローマ字本二種(東洋文庫本と水戸德川家本)、國字本二種(バルベリニ文庫本とカサナテンゼ文庫本)が現存してゐる。東洋文庫本は最も古く、德川家本とカサナテンゼ本は、同年に出、バルベリニ本は刊年を記さないが德・カ兩文庫本より古いものとされてゐる。東洋文庫本とバルベリニ文庫とは用字の別を除いて内容は殆ど同じである。兩文庫本も用字の差のみで内容はほぼ一致してゐる。

刊年の古い東洋文庫本と新しい德川家本と二種のローマ字本を對比すると編序、用語等に多少の修訂がみられる。編序について云ふと、新刊の方には「貴きビルゼン・マリヤのオラショ(Oratio 祈禱文)とて百五十遍のオラショの事」といふ一節が加へられたことで、これは恐らく舊刊の方に百五十遍のオラショ、即ち、「この十五個條の題目は板木に開きたる一紙に在り」(橋本進吉博士翻字本三一頁)とある其の一枚刷の文書を新刊に組入れたものと思はれる。も一つ、舊刊にあつた食前食後の祈禱と「吉利支丹知るべき條々の事」「言葉によつての和らげ」等が新刊の方から除かれたことである。新刊本に雜句集を除いたのは、新刊本發行の年までには、拉葡日對譯辭書(一五九五)の如き立派なものが出來てゐるからであらうか。

用法に就てみると、新刊本は舊刊本の用語の文學的抽象的表現を改めて、平易に具體的に書き變へた跡が見える。例へば舊刊本の序に、「言葉は俗の耳に近く、義は天命の底をきはむるものなり」と記し、卷尾雜句解に天命の底なる

句を擧げて「デウス（Deus. 天主）の御サンターデ」と注したのに對し、新刊の德川家本（吉利支丹叢書複製本に據る）は「言葉は俗の耳に近く、義はデウスの高き道理(ことわり)を表すものなり」とあり、又舊刊本の「その故はスピリツ（Spiritu. 精靈）なれば刀劍(たうけん)矛楯も彼に用ゆる道なし」が新刊本では「いかなる劍(つるぎ)もおそるゝ事なし」と改めた如きである。も一つの注意を引くのは、舊刊本で原語のまま用ゐた言葉を新刊本では邦譯してゐる事である。例へば舊刊本第二章（橋本博士校本一〇頁）の祈禱文は一旦 Persignum sanctae crucis de inimicis …と拉丁原文をあげて次に其譯文を記したに對し、新刊本は拉丁原文を省いて直ちに、「我らがデウス、サンタ・クルス（聖十字架）の御標(みしるし)をもつて…」と邦譯を示してゐる。又、舊刊本第一章（橋本氏一〇四頁）に「此の測りましまさぬサカラメント（Sacramento. 祕蹟）はナツウラ（Natura. 自然、本性、人智）の上のミステリヨ（Mysterio. 玄義なるを…）とある所を、新刊本は「この測りましまさぬサカラメントは、世界の道理の上の理(ことわり)なるを…」と譯してゐる。

然し吉利支丹特有の宗教觀念や神學的内容を含む語彙は、兩刊本共に原語その儘を用ゐて原意の純粹性を守つてゐることは他の吉利支丹版の場合と同樣である。序ながら舊刊本がおうかめ（狼）と訛つたのを新刊本ではおうかみと改めたやうな訂正も見える。かういふ訂正では南蠻文學飜譯の方針の變化を暗示してゐると思ふ。

此等のドチリナ・キリシタンが當時の知識階級であつた武士階級を目的としたことはサトウ卿がその書志に推考してゐるが、本書が廣く讀まれたことは、先年攝津高槻の山間から發見された中谷仙之助氏舊藏「どちりなきりしたん」がバルベリニ文庫本と同版本の忠實な手寫本であり、舊伊達家の遺臣の家に傳へられて、今、林若吉氏の藏に歸してゐる寫本「一切支丹抄」が、本書中の十五の觀念の本文と注解とであり、水戸德川家藏の寫本「吉利支丹心得書」中の

抄記が、東洋文庫の章句と一致する如き事實に由つても推察される。東洋文庫本には橋本博士の精密な翻字と研究とがあり、原本の寫眞複製本も添へられてゐる。水戸家本は大毎の吉利支丹叢書中に寫眞複製本がある。

東洋文庫本は紙數百十四頁、初頁から百頁までが教義問答で、次に六頁にわたる「もろ〳〵の吉利支丹知るべき條々」と雜句集が附いてゐる。師弟問答の狀を窺ふため、第一章から引用しよう。

師。人間の事をば何と分別せられけるぞ。

弟。人間は色身ばかりにあらず、果つる事なきアニマを持つなり。このアニマは色身に命を與へ、たとひ色身は土灰となると云ふとも此のアニマは終る事なし。唯善惡に隨つて後生の苦樂に預るものなり。

師。よく分別せられたり、カテキズモ（Catechismo. 問答）の談義の理より外にキリシタンの知らずして叶はざる事多きなり。

弟。その義を承ればこそ、御教化に預りたきと存ずるなれ。

次に第五章から詩情に充ちた流麗な祈禱文の一節をあげる。

憐みのおん母・妃にて在します御身に御禮をなし奉る。一命甘味、我等がスペランサ（Sperança. 希望）にておはします御身へ御禮をなし奉る。流人となるエワ（Eua. イーヴ）の子共、御身へ叫びをなし奉る。この涙の谷にて呻き泣きて御身に願をかけ奉る。是によつて我等が御取做し手、憐みの御眼を我等に向はせ給へ、又この流浪の後は、御胎内の貴き實にておはしますゼスス（Jesus. 耶蘇）を我等に見せたまへ。深き御柔軟、深き御哀憐、すぐれて甘くおはしますビルゼン・マリヤ（Virgen Maria. 童身マリヤ）かな。

用語文體等の語學的文學的研究は橋本・村岡兩氏の著書にゆづるが、全章至る所に用ゐられて目立つのは、アニマ（靈魂）、ウマニダアデ（人道）、カスチダーデ（貞潔）、ケレド（信）等の原語の宗教語や、イデア（觀念）、ホルマ（形態）、マテリヤ（實質）、シエンシヤ（知識）等の西洋哲學語が、內證・色身・善根・出離・現世後世・談義等の佛典語と相對して用ゐられて、此等和漢洋語の自由な驅使に依つて耶佛兩教の本質的差異を明かにしてゐたことである。之を文學的に見るならば、內容が教會規定の教理である丈けに、譯述者らの文才を充分發揮する餘地は無かつたらうが、布教以來僅か半世紀を出ですして斯る教理書を纏め上げたのは、我國佛教文學の側にこの種の教義解說書の乏しいのに比べて特筆すべき業績である。

「ぎや・ど・ぺかどる」が信仰の手引書修養書として最も廣く愛讀されたものの一であることは當時の宣教師の報告書や傳道史にも見える。村岡氏は「ぎや・ど・ぺかどる關係事項年表」にパヂェス（Pagès）の「日本耶蘇會史」から三項を抄出して本書の愛讀された證據をあげられた。慶長十四年黑田長政の叔父、筑前秋月城主黑田惣右衞門ミカエルが其病中に本書を讀んだ事、同十九年有馬で殉教した高谷久左衞門ジュアンが愛讀した事、元和三年長崎の在所で靈父マヴァレッテが致命者の爲に本書を朗讀した事の三つである。一六〇〇年一月の宣教師マットス（G. de Mattos）の書翰にも、長崎の慈善（ミゼルコルディア）院で有力信者集合の席上、週二度づゝ本書の朗讀と解釋を試みたことを載せてゐる。

本書の吉利支丹版の現存せるもの七部、上下完本二部、上卷又は下卷のみのもの五部で、他の刊本に比し最も多く殘つてゐるも、本書が普及してゐた反映であらう。七部のうち大英博物館本と巴里國民文庫本は古くより知られ、國

民文庫本は明治六年岩倉特命大使らの眼にも觸れたらしく、「米歐回覽實記」四十三卷に、「此庫ノ與ニ（中略）日本書ノ棚モアリ、其内ニ慶長年間に翻譯セル、キリシタン教即天主經ノ書アリ、其文體ハ極メテ俚俗解シ易キ文ニテ曾我物語太閤記横本ヲミルガ如シ、一部數冊ノ書ナリ、我國ニテハ久シキ嚴禁ニテ嘗テカヽル板本アリシコト、誰モ知ル人ナキ奇本ナリ」とあるのは本書を指したのであらう。

我國では佚してしまつて、村岡氏の校勘複刻された（古典全集第二期刊行）ものに由つて其全文を窺ふの他なかつたが昭和七年丸善書店が伊國トリノから本書の上卷を回收することによつて、我國にも原本を有するにいたつたのは喜ぶべきことである。又本書の上卷一冊が、西國エスコリヤルのサン・ロレンソ文庫から土井忠生氏によつて發見されたことも特筆に價する。丸善新得本は、昭和七年「天正使節渡歐三百五十年紀念珍籍展覽會」の席上に出陳せられて一部人士の眼にも觸れたが、其裝釘の原裝のまゝなることは殊に懷しくも貴く、その裏表紙は麗はしい七五の桐の花模樣を曇りをおびた灰色の地に雲母刷にした優雅なものである。

丸善本の體裁は前記の展覽會目錄記載の寫眞に由つて知らるゝとほり、慶長四年版漢字平假名交り文で、和洋二種のタイトルペイヂを有し、拉丁語で一五九九年耶穌會學林刊行の旨を記し、國字で、「ぎやどぺかどる、罪人を善に導くの儀也」といふ標題と刊記とを記す。目錄二頁、序と本文併せて百七枚、字集十二枚、美濃紙摺、活字刷で字體は優艷な草書である。昭和九年夏飛驒の白川村あたりの山寺で發見されたよしの合綴本一冊の今尙ほ行方不明なるは惜みてもあまりある所である。

原著は、西國グラナダの高僧ルイス・デ・グラナダの著した書であつて、書名は罪人を善に導くの意味である。其

根本思想は現世の榮花の短かきこと、デウスの恩寵のみが頼むべき唯一のものであると說き、「善を勸むる道を敎へその規則を示」してゐる。かつて、私は之を勸善鈔と名づけておいた。原著は一五五五年の初刊後、宗敎文學の名著として廣く歐洲によまれ各國語の翻譯があつた。我が吉利支丹版は原著にやゝ省略を加へて上卷二十二章下卷二十章、大體原文の忠實な直譯である。譯者は不詳であるが、他の譯書と同じく和漢洋語を巧みに併用して然もその文章表現上に破綻を示さず、邦人の耳に既に親しみ深かつた佛敎語と新しい響きを以て迫る原語を按配して、語感に訴へる效果と文辭文脈の與へる感銘とを鮮明深刻ならしめた。本書を通じて當代の吉利支丹たちは歐洲中世神學思想の一端にも觸れ得たわけで、これを宗敎文學の作品として見るも、その紙背を潤ほす沈痛な宗敎的情操、その行間に流れる敬虔な求神的熱誠は當代のわが國の吉利支丹たちに多大の感銘を與へた事とおもはれる。南蠻文學の代表作たるに恥ぢぬ。

次に上卷第六章から其一節を引用しよう。

> 然れば生死をうくる面々、我は人也。きりしたんなりと思へ。人としては死するを遁るゝ事なし。又きりしたんなれば、一期の間の善惡の御糺明に預らずといふ事なし。朝には暮を待たず、夕には朝を期する事あるまじき時剋到來すべし。今は六根も盛にして、明し暮すと云ふとも、忽ち病の床に臥して今を限とする時來るべし。是を今よりよく〳〵思案せよ。（中略）既に一息裁斷に及びぬれば、先づ眼は光を失ひ舌は物いはんとするに叶はず、面の色は薩野の草の綠に等く、豐顏の美麗は垢膩のあかつける粧となり、いまだ息の通ふ內よりはや尸を曝すにことならず。その時汝が生れし日の母の苦みを試むべし。

此等の行文の間に潜む無常觀・厭世思想は哀切を極めて、さながら白骨の御文章でも誦する氣持がするが、譯文とはおもはれぬほどの和文ぶりの中にも最後の一節のごとき鋭い歐文脈の名句を交へてゐる。この無常觀を述べた文章と對比するため、天上の安樂を述べた輝かしい一節を上卷第八章から拔いてみよう。

茲を以て如何に兄弟、此等の道理眞實なれば、爭でか現世一旦の寶位榮華なる望みをのみ、專ら隨ひて、果しなき眞の悅びを願ひ求めざらんぞ。歡喜快樂を望むにおいては、仰ぎて諸樂充滿の天を見よ。世界にて御作の物の德儀を知るさへ樂みとするに、況や天において御作者御主を見しり奉る事、如何計りの事とか思ふや。(中略)此れ則ち安樂の世界なるが故に、萬づの障りなき歡喜自在になからふべき者也。諸々のあんじよ(Anjo. 天使)、べあと(Beato. 聖人)を友とし、ぱちりあるか(Patriarcha. 教宗)の隨ひ、ぽろへた(Propheta. 豫言者)のゑすぺらんさ(Esperanga. 望德)まるちれす(Martyres. 致命人)の血の冠、びるぜんの花の粧ひ、其他面々の善に應じて色々の寶冠を戴き、光り輝かるゝを見るべし。

次の例文などはいかにも歐洲文學の移植らしい新鮮な匂ひに溢れてゐる。

さん・じよあん(San Joan)十ヶ條にEGO SUM PASTOR BONUS…我はよきぱすとる(Pastor. 牧羊者)也。わが羊を見知り、羊も又我々を見知ると宣ふ也。(中略)ちり〴〵になりたる羊をぱすとるの尋ぬるごとく、我も又、くもりて暗き日に、在々所々より引集め國々より取納め、本國へ引つれ、いすらゑる(Israel. イスラエル)の山河國土のよき牧にてかふべし。又澤山なる草にてかふべし。是、いすらゑるの國の高き山にをいての事なるべし。そこにて綠りなる草の上に寬げ、澤山に草をかふべし。われらが羊をかひ、寬ぎの眠りを與ふべし(中略)いさいや

す（イザヤ書）四十に SICUT PASTOR GREGEM…ぱすとるの如く、御身の羊をよび給ひ、御羊をもて其子を集め懐にし給ふべし。或は妊み或は子をうみける羊を御肩にかけ給ふべしとも見えたり。嗚呼恭き御辭かな。是に勝りたる甘露の御辭あらんや。

このやうな雅趣に富んだ田園詩でも吟ずるやうな一節は、あの松平直德子爵藏の優艶な洋畫小屏風、南歐の暮光のどかな水のほとりに羊を守る明眸紅頰の小童の姿を思ひ出させて、異國情緒をそゝられる。牛の背に笛吹きすさむ髮おどろな唐畫の牧童をのみ見なれた當代の吉利支丹たちに、あのやうな朱衣をまとひ杖を携へた遠西の丈高きパストルの姿が想像出來たであらうか。惜むらくは水戸家傳來の西洋銅版帖にもその姿は見えぬ。天草本伊曾保物語には「パストルと狼の事」「パストルの事」の二話が載つてゐる。

前出の引用文中にもあるやうに、本書には、新約舊約兩聖書からの引用が多く、村岡氏は「吉利支丹文學抄」中の「聖語集」に其等を抄錄してゐられる。尙本書には、ぜす、ぜす・きりしと、でうす、きりしたん、きりしと、以上の四語に連結略符を考案したり、ぱぴぷぺぽの半濁音を用ゐたり、洋語人名に星標（アステリスク）を附したりするやうな印刷上の特色も認められるが詳細はこゝに略する。

「ぎや・ど・ぺかどる」と同じ著者の名著、Symbolo de la Fe. の抄譯なる「信心錄」一名「ヒデス（Fides. 信仰）の導師」は、「サントスの御作業」に次ぐ初期本である。譯書緒言三頁、法皇グレゴリヨ十三世の書翰四頁、著者序文五頁、本文六一九頁、他に難句集が二十四頁、目次七頁である。本書はライデン大學に一本を存するのみであつ

ただ、我國では姉崎博士の全文の翻字注解によつて其内容を明かにすることだ出來るやうになつた。全卷を四つに分ち、信仰の內容を示すと共に信仰の實行を敎へ、贖罪の意義を解き、人類救濟の所以を明かにしてゐる。編者ソセンについては既に記しておいた。卷一の「第一、ヒィデスの一番のアルチイゴ（Artigo. 信條）はデウスましますことを信じ奉る事」の冒頭の一節を引用しよう。

さるほどに、ヒイデスのアルチイゴのうちに第一番に信じ奉ることとは、デウスましますといふ儀なり。この心は、この世界に於て萬事を治め計らひ給ふ源、御作者ましますといふ儀なり。この源より天地も四大も、ありとしあらゆる物も、皆保たれ奉るもの也。是れ即ち天地の間に具はるほどの物の御作者にてましませば、始めもなく終りもなき尊體なり。諸善諸德はこの源より出づるに依つて、第一の善の源とも申し奉るもの也。是れ即ち第一信ずべきヒイデスの一番の地磐なり。之を指してアポストロ（Apostoro. 使徒）の宣ふ御言葉あり。（Credere enim oportet …デウスへ近づき奉る者は、この御主ましますと信じ奉ること肝要なりといふ語なり。（中略）サン・トマス（S. Thomas）此等の義を論じて宣はく、學匠達はこの第一のアルチイゴをば、ヒイデスを以て信ずることにはあらず、たゞ明白に辨へらるゝもの也と。

かういふ東洋在來の宗敎觀念に比べて新しい神學的觀念を含み、基敎の根本思想なる一神論を强調した本書の文章が自ら我國宗敎文學の裡に伍して異色ある內容・文體を示してゐるのは云ふまでもない。スコラ派の學僧トマス・アクイナスの名の見えてゐるのも注意すべきである。おなじ章の初めの方に次のやうな一節もある。

されば ヒロゾホ等、デウスましますと知る踏えの一番は、諸天の運るを見らるゝこと也。

天體運行說に觸れ、アリストテレスの學說に據つた說明である。一五五二年シャビエルがロヨラに送つた書翰に、日本人は天體の運行に關する智識を喜ぶ故に天文學の教養ある宣教師を要すると述べて居り、一五六二年アルメイダ Almeida は鹿兒島在留中その地の禪僧たちに天文學を講じて傾聽せしめ、一五六一年ヰレラ Vilela が京都のある公家の天文家に西洋星學を論じて之を感服せしめ歸依せしめたといふ史實を背景にしてこの章をよむと、シャビエルの書翰後半世紀にして刊本の上にかういふ學說が載せられてゐることを興深くおもふ。

星の名ではないが希臘の女神のベヌス Venus やバッコウ Baccho、卽ち酒神バッカスが出てゐる。「いんらんの邪まなる道の司ベヌスといふ本尊」、「醉興を本とし、埒をはづれたる亂れがはしき身持を以てバッコウといふ本尊に手向をなすことあり」。酒神祭を指すのであらう。これらの「本尊をばいかなる者と思ふぞ、卽ち天狗なり。」と錄してゐる。「エピクロといふ惡逆無道なる者」は Epicuro、快樂主義者を指す。希臘思想と基教思想との反目を仄めかしてゐる此のやうな零語も見える。第二卷第六章に原語のまゝ用ゐられた、パライゾ・テレヤル Paraiso terreal は謂ゆる地上樂園で、歐西ではトマス・モアの「ユートピア Utopia」英譯本が出て半世紀後、東邦の吉利支丹達に地上樂園の原語が傳へられたわけである。又、本書第一卷第一章には、人體の構造、血管動脈の作用、腦髓、神經、五感の川を當時の學說によつて說いた個所もあり、後年杉田玄白らの解剖書翻譯を想起せしめる。第一卷第四章では「四大の事」を論じて近世の西洋における近世の自然科學的思考をも紹介してゐる。日光の效用を禮讃して次のやうな淸新な表現を示してゐる。

先づ第一は美しき事なり。さればこの日輪、曙の横雲を拂ひてさし出づる時は、いかほど麗はしき姿なるや。

「信心錄」は元より宗教書ではあるが、これを南蠻文章の方からながめても、多くの興味あり、價値ある資料を含んでゐる。いかめしい宇宙論や一神論の談義のみならず、本書中には次例のやうな日本ぶりの優しい敍景もある。第二卷第十六章から修道の童身女を述べた一節を引かう。

このビルゼンスは麻の衣を身に纏ひ、素足にて歩みをなし、寢屋のしとねとては藁の莚なり。夜もすがらオラショし給ひ、さも古は優にして、沈麝をくゆらし、綠の髮をも今はときくださるゝ事なく、花のかんざしをば地に抛ち、白布のきれにて髮を包み給ふ也。（中略）その御所作には、賤の女たどの營みなる機物を織り、糸をくる業のみし給ふ也。

本書の編者はその緒言に譯出の方針として「媚びたる言葉を除き、世話に綴りて」と記してゐるが、此のやうなお伽草紙でも讀むやうな雅馴な文章は本書の後節に多くみられる。

次に「ぎや・ど・ぺかどる」と並んで當時の吉利支丹に最も廣く讀まれたと思はれる「こんてむつす・むんぢ」に附て一言しよう。本書には二つの刊本があつて牛津ボドレアン文庫藏のローマ字綴本と林若吉氏藏の漢字平假名交てある。林本はローマ字本に比して諸句の改訂が試みられてゐる。林本は嘗て越前福井の舊信徒の家から發見されたものであるが、サトウ卿の「一書志」日本複刻本には卿自身の筆で、ミュンステルベルヒの書志によつて、伊太利ミラノのアムブロシアン文庫に本書のローマ字本一部を存する旨書入れがあるが詳細は不明である。林本は嘗て稀書複製會から見本數葉が複製せられてその面影を偲ぶことが出來る。ボドレアン文庫はその一部なり全部なりが、村岡及び姉

崎兩氏に依つて翻字せられた。

ボドレアン文庫本は、序二頁、本文四三〇頁、目錄一一頁、難句集一五頁。本文は四卷、百十九章に別れてゐる。クイトルペイヂには、「コンテムツス・ムンヂ全部」と題記し、「是れ世を厭ひ、ゼス・キリストの御行跡を學び奉る道を教ゆる經」と傍記してある。表紙につゞく餘白には、「誰にてもあれ、この經のうち一ヶ條を讀む度ごとに、十年のイングルゼンシヤス（Indulgencias. 赦免）を蒙る也。ベヤテイシマ・マリヤ（Beatissma Maria. 至善のマリア様）」云々のローマ綴の書入れがあつて、當時の邦人信徒の筆と考へられる。序文には、「ラテンの正本より慥かに翻譯し、校合度々に及んで、深旨を和らげて以て梓に鏤む。（中略）所詮デウスの量りなき美の源にてまします御上より此の賜物をあたへ給へば、歡喜踊躍の心を以てこの書卷を常にもてあそび、讀みては讀み、幾度も讀みかへして善の道の師範と仰ぐべきもの也」云々とある。以て其の翻譯の態度を知ることが出來る。

原著名は、De Imitatione Christi. 別名、Contemptus Mundi. である。吉利支丹版は別名の題をとり、私はその題意を酌んで「厭世經」と譯しておいたが、今は廣くイミタシオ・クリスチ、卽ち「基督の模倣」といふ題が用ゐられてゐる。原著者トマス・ア・ケムピス Thomas a Kempis. は十四世後半、南和蘭に生れた著名な修道僧で、この原本は十五世紀中頃までには完成して居たらしく、寫本として行はれ、一四七一年頃始めてアウグスブルグで印行され、續いて廣く各國語に譯されて、聖書以外では最も多く愛讀されたと云ふ。其根本思想は、祈念と默想と捨離によつて魂の平和を求め神恵にあづからんとするのであるが、原本の著述後一世紀半を經て印行された我が國吉利支丹版本も亦、きびしい內省と虔しい求願とによつて深められた原著の觀念や情操を邦語に移植するに際して、その譯業は

技藝の成績を示し、文章の雄勁と清韻は、正に南蠻文學史における翻譯文學中の壓卷として推稱することが出來る。

一六〇三年一月のマットスの書翰にも、日本人が本書を甚だ好み、よく利用したことを告げてゐる。譯者に附ては、パジェスは、刊行の前年頃、金谷ジャンなる信徒が譯述せるものと云ふが明かではない。天正使節中の原と中浦の兩人が本書の翻譯印行に努力したことは既述のとほりである。恐らくは最も有力な吉利支丹文學者の協力に成り「校合度々に及」んだものであらう。

明治以後にも本書の翻譯は度々行はれて、古くは明治廿五年櫻井近子女史の「基督の模範」を始めとし、大正九年には小黑康正氏の「基督模倣」と中山昌樹氏の「基督に倣ひて」、翌十年には中村詳一氏の「基督の道」、昭和三年には岩波文庫から内村達三郎氏の「イミターショ・クリスチ」等が出て、内村氏の譯は拉丁文からの譯で正確を以ては知られてゐる。ラゲーの佛和辭典には「遵主聖範」と譯され、古く明の崇禎十三年（寛永十七年）支那の耶蘇會で譯された本書には「輕世金書」と名づけられてゐる。

今、内容を窺ふためにローマ字本から卷頭の一節を引用する。「御主ゼスキリシトを學び奉る經、卷第一」のうちの「第一、世界の實もなき事を卑しめ、御主ゼスキリシトを學び奉る事」の初めに當る個所である。

おんあるじの宣く、Qui sequitur me, non ambulat‥ 「われを慕ふ者は闇路をゆかず、たゞ壽命の光をもつべし」と也。心の闇をのがれ、誠の光を受けんと思ふに於ては、キリシトの御行蹟とおん形儀を學び奉れ、この御言葉を以て勸めたまふ也。然る時んばキリストの御行蹟の艱難をわれらが第一の學問とすべし。キリストの御教はもろもろの善人の教に勝れ給へり。善の道に立入りたらん人は御教にこもる不可思議の甘味を覺ゆべし。（中略）ビイビリ

ア（バイブル）といふ貴き經文を盡く暗んじ、もろ〳〵の學匠の語を皆知りても、デウスの御大切と其の御合力なくんば、是れ皆何の益かあらん。デウス御一體を大切に思ひ仕へ奉るより外は、みな實もなき事の中の實もなき事なり。ことなり。此の世を厭ひて、天のおん國に志すこと最上の智慧なり。斯くの如くある時んば、過ぎ去る福德を尋ね求め、それに頼みをかくることは實もなき事なり。位、譽れを望み歎き、身を高ぶることも亦實もなき事なり。骨肉の欲するにまかせ、以後はなはだ迷惑すべきことを望むは、實もなき事なり。（中略）Oculus non vidit……眼は見ることに飽きず、耳は聞くことを以て達せずといへる貴き經文の語を常に思ひ出だすべし。

文中ビイビリヤは Biblia 即ち聖書であつて、聖書からの引用句のあるものは拉丁原文をその儘掲げ、次にその譯文を附してゐるのは平假名本に於ても同樣である。「實もなき事の中の實もなき事なり」は、舊約、「傳道之書」のなかの甚だ有名な句で、現行の譯本は「空の空、空の空なる哉、都て空なり」となつてゐる。初めの方の拉丁文は姉崎博士の注解によれば「ヨハネ福音」からの引用であり、後の方のは「傳道之書」からの拔萃である。本書にも兩聖書からの引用が頗る多い。今二三を擧げてみよう。

・いかにおん主、涙の食を與へ給へ。又、涙を飲物として潤澤に與へ給へ。（詩篇）

・いかにおん主、誤りたる科の後悔は御內證に叶ふ進物なり。是れ乳香よりも尙、御前にて異香薫ずる也。（詩篇）

・童部の如くになりかはらぬに於ては、天の國に至るべからずと。かるが故に小き童部の如く誤りたる者、天の御國にて廣大なる人たるべし。（マテヨ福音）

次に本書の序文に「歡喜踴躍の心をもつて此の書卷を常にもてあそび」とあるに因んで、「書物を持つて片隅に」在

るを善しとした原著者の風貌を窺ふべき一章をあげる。第一卷第二十章、「閑居默坐をすき好むべき事」の初にあたる。

我が身を省み、思案工夫すべき似合の時節を尋ね求め、デウスの御恩を繁く觀念し奉るべし。面白くとも實もなき事をさし置き、閑を妨ぐる書よりも菩提心を起す書籍を繁く讀むべし。（中略）閑居默坐に於て、信心なるアニマは徳を得、そこにて貴き經文の深き心を習ひ知るもの也。こゝにて身を洗ひ淨むる涙の河に値ひ、世界の騷しき事を遠ざかり、倘ほ御作者に親しくなり奉るべし。かるが故に、知音朋友に遠離するほど、デウスとアンジョスに近づき奉るべし。我が身を忘れて奇特を現ずるよりも、閑居して身上を省ることは倘まさりたること也。

閑居孤坐して神を想ふことは原著の宗教思想の一つの大きな特質であつた。

和漢洋語を手際よく用ゐてゐることは例の如くで、原文の悲慘の谷を娑婆世界と譯したり、枯木と無用の木片を枯木寒鴉と詩化したり、Diabolus 即ち惡魔を天魔破旬と譯した例もあるかと思ふと Serpens antiquus 即ち古への蛇を古敵なる天狗と譯してしまつて、智慧の實の傳說の蛇の意を失つてしまつたやうな惜しむべき個所もある。天狗の用語では、第三卷第七章に、「いかに拙なき天狗、そこ立ち去れ。」といふ句がある。九州浦上外海地方の潜伏信徒たちに幕末の頃まで密かに口傳せられた、恐しい所を通る時の祈禱文、

大天狗、大天狗、そこ立退けろ、此路はデウスの路、御身樣の御言葉を以て通らすぞ。

は恐らくは舊系統の洋文の語脈を保つたものであらう。

第三卷第六章に見える「われ未だ御大切によわく」の御大切は、Affectione, caritas, charidade 即ち love にあたる譯語で、愛、惠みの意味の吉利支丹文學特有の用法である。慶長八年版日葡辭典は大切に對して Amor（愛）とい

ふ術語を當ててゐる。「サントスの御作業」第十六卷第三章中の「雅歌」(八ノ七)には、「何たる洪水なりとも大切を消すこと叶はず」とあり、浦上地方の舊信者の口傳を基にして編纂して明治七年の「聖教日課」にもこの用法は傳承されて、「デウス、おん身は限りなき御善德、御大切の源」と記されてゐる。至切といふ最上級の用法も見える。天草本「金句集」には「思ふ時んば胡越も地を隔てず」の解に「大切があれば、いかに遠い所も遠いと思はず」と用ゐられてゐる。

次に日本で發行された吉利支丹版のうちには入らないが、寛永九年(一六三二)羅馬で刊行された「懺悔錄」は、慶長元和の交、禁教の警め愈々きびしく迫つて來た布教末期に於ける吉利支丹たちの懺悔告白の內容を明かにし、又信仰生活の實狀をも露はに示す宗教文學資料として珍重すべきのみならず、地方的な風俗史料、方言俗語を交へ、文化史料としても多くの興味ある記述に充ちてゐる。

序、本文、正誤を加へて約六十六頁、國語はローマ字を以て左面に、拉丁文は伊太利字を以て右面に掲つてある。原本は幸に我國にも存する。慶應二年(一八八二)パジェスの複刻本があり、私も明治三十四年その一部を抄出して解題しておいたが、近くは「改造」(昭和三年二三月號)に故人吉野作造博士と松崎實氏の協同翻字解說があり、別に姉崎博士のせられたのも存する。原著者コリヤードは西班牙ドミンゴ派の宣教師で、元和五年(一六一九)渡日、日本語學者としてはロドリゲースに次いで著名であり、羅馬に於て出版したその編著なる日本文典日本辭書は廣く世に知られてゐる。寛永十五年(一六三八)マニラへ渡航中暴風に遭つて海の藻屑となつたのは傷ましい。

本書は十戒、即ち、どちりな・きりしたんに載る「デウスの御掟の十のマングメント（Mandamento. 戒）の事」に違反した所行に對する告白である。題言には次の如く記されてゐる。

日本の言葉に能うコンヒサン（Confissao. 懺悔）を申す樣體と、又コンフェソル（Confesor. 聽罪僧）より御穿鑿めさるゝ爲の肝要なる條々の事。談義者の門派のフライ・ヂダーゴ・コリヤードといふ出家、羅馬に於て之をしたてもの也。一六三二。

第一番の掟「第一御一體のデウスを敬ひ尊み奉るべし」に對して、次のやうな師弟の問答がある。

師。して前のコンヒサンの科送をば勤め果しあつたか。

答。宛てさせられた彌撒（Missa）は最早科みまらしてござる。所當も大略致いたれども、たゞ人に借を濟せと、また他人より無理に取つた金をばその主に取り返せと仰せつけられたばかりを、仕らいでござる。さりながら今日最早、打ち戻さうと思ひ定めまらしてごごろに依て、御氣遣ひあるな。

師。叶ひながら其金を戻しあらなんだか、力の及ばいでか。

弟。嫌がる時もござり、無精でそれも致さぬ事もあり、兎角それは身が深い過りでござる。

同じ章からもう一節引用しよう。

弟。また近所の不吉利支丹の上の事どもも皆その身の望みのまゝになるを見、また世界の事に就て善い吉利支丹衆の散々の態を思ひ量る時は、デウス、インヘルノ（Inferno. 地獄）の苦患を受けらする果報拙いゼンチョ（Gentio. 異教徒）どもには御慈悲の上より今の少しの快樂を遂げさせられて、後世の果しない無事安樂を受

けさせられうずる吉利支丹達には、下界にたゞ難儀辛勞ばかり當てさせらるゝ事、まことにデウスの不可思議なる御憲法おん憐みでござると申すもござる。一度も二度もデウスに對して恨み述懐仕まつて、さても逆樣のデウスの御計らひ哉！と存じて、デウスと少し叱りまらした。これは心根からでござなかつたけれども、不信心微ひなくして、デウスの堆高い御事をば取扱うた事は身が誤りでござる。また鴉なんどの啼くを聞くに就て、時によつては構ひまらせぬ、さりながら二三度は氣に障つて、定めしわが事の上に何か災難禍殃があらうぞ！と氣遣ひ致しまうした。

迫害の嵐のなかに、多くの致命者の流血も現實に見聞し、次第によき指導者を奪はれて行つた末期信徒の、殉教苦難に對する疑惑の心理が窺はれ、鴉の聲にも心さわぐほどの信仰の動搖が見られる。「また鴉なんどの啼くをきくに就て……」の一句、いかにも印象的で鋭くあはれに迫る。當代の吉利支丹が教外のものを呼ぶにゼンチョと原語のまま用ゐるのは普通であつたが、こゝには「不吉利支丹」といふ興味ある用語もあらはれてゐる。南蠻文學用語では justice の譯語、憲法に對して「不憲法」といふ特異な用法もある。「デウスの堆高い御事」の堆高いは、いみじきの意の南蠻文學慣用の直譯語であつた。「ぎや・ど・ぺかどる」には「御與へ手の堆く在ます御內證」とあり、「こんてんつす・むんぢ」には「他人の上をば常にうづ高く思ひなし」とあるが如くである。

次に「慈悲の所作に對して」に次のやうな興味ある一節がある。

わたくし鐵砲藥を作る者でござれば、阿蘭陀のエレヘス海賊人に其藥を賣り、その上、兵糧、鐵砲、その彈、石火矢、海戰の道具をも皆たづね出し、その爲に買ひまらしてござる。とかくあれ等は轉宗吉利支丹と海賊の者なれば、

定めて左様に申した事を責りつゞするが御戒めでござらうと推察いたしながら、四年の間にし續きまらした。

エレヘスは herejes. 即ち異教徒の意である。

吉野松崎兩氏は「阿蘭陀のヘレジエスなる海賊人」となるを補つて同格に解せられた。海賊といふ言葉は慶元頃にはかういふ場合には英國を指すことが多く、慶長末年來朝した英國のセーリス特使の日記にも英人が南蠻伴天連から海賊と謗れた由記してをり、元和年間にはまだ平戸に英國商館もあつたから、或は、和蘭人及び英人の意かも知れない。この箇中にも「轉び吉利支丹と海賊」となつてゐる。因みに天正二年五月（一五七四）伴天連カブラルの發した書翰には、彼が海賊船に乘つて九州から讃岐鹽飽島に渡つたこと、又そこから堺へゆく海上で、長銃弓矢を備へた十七隻の海賊船に出會つたことを記してゐる。

師弟問答の形式は後に記す南蠻本平家のそれに匹敵し、その口語文體は平家・伊曾保やロドリゲース文典中に引用の吉利支丹文學のそれに對應してゐるが、前者が文學的口語であるに對し、「懺悔錄」は文學的意識の少い比較的素朴な日常語の筆錄である點、まゝ南蠻人の日本語らしい片言めいた個所もあるにはあるが、當代の口語資料として無二のものと云はねばならぬ。史料としても、吉野松崎兩氏も私も指摘したやうに島原陣のことを暗示した個所もあり、宗旨改めの實狀を具體的に記した所もある。又當時の民間信仰や貸借關係、家庭生活や愛慾問題の内面にまでも觸れ、その取材の範圍は九州から京阪までも及んでゐると考へられる。

三

吉利支丹版宗門書に對校すべき各種の現存寫本類について簡單に記しておく。

水戸德川家に傳來された舊寫本十一二種のうちには、「どちりな・きりしたん」の抄錄や、吉利支丹暦や教義の用語解、十戒を寫した卷子本、刊本「サントスの御作業」中のコンヘソル・アレイショ物語を寫したもの、拉丁文の彌撒唱文や連禱、オラショをうつした斷簡、西洋銅版畫帖がある。「妙貞問答」(後出)の抄寫本もある。南蠻伴天連がその布教に當つて、佛教のある部面の思想や樣式や用語を攝取し、これとの調和を圖り、又佛僧出の教徒を利用したことは明かであるが、水戸家には彼等の佛教研究を窺ふに足る佛書の抄錄も存する。

攝津高槻在の山間なる中谷氏東氏の兩家から發見された寫本類のうち中谷家舊藏「どちりな・きりしたん」寫本については林若吉氏藏寫本と共に先にあげておいたが、東氏藏の抄物は卷首に、「御みいさのおがみやう並に觀念の事」と記された百四十枚ほどの慶長頃の舊寫である。中谷東兩家發見の吉利支丹遺物に付ては「京都帝大文學部考古學研究報告」第七册に詳說しておいたから省略する。水戸傳來本、高槻發見本の多くは大indeed の「吉利支丹叢書」中に複製せられてゐる。東氏藏の抄物から、抒情詩のやうに優麗なサンタ・マリヤへのコロキヨ(Colloquio. 話祈願)を原文のまゝ引用しておく。

いかにびるぜんさんた・まりや、つゝしみうやまつて申上奉る。われひぼのたいないよりいとけなきほとは、いは

木に同ク、春秋をおくり、年たけ世あひさかんなれば、すでにいひせの津を渡り、世のうきよしに心をくだき、うき事きかぬよるべ何國そとたづねれは、てんの御國より外になしと露斗なるよすがをもとめて、つひにはかりたき御ひかりをかうぶり、しするかげの國よりひかりのみちにいてながら、さいしようのうみなをふかく、しやうしの山ます〳〵たかうして、御大切のさわりとなりてしづむ我等をたすけたまへと、爰にてきりへあへまりや三くわん申てくわん念をいたす也。

尙九州地方の舊信徒に傳承され教義抄錄類、曆日表、口傳せられた祈禱文は、浦川和三郎氏著「日本に於ける公教會の復活」前篇附錄に載せられてゐる。白石が寶永五年潜入した伊人宣教師シローテから天主教々義を聞いた詳細は「西洋紀聞」「邏媽人欵狀」（白石全集第四卷）に見え、寬政九年太田全齋の識語ある「契利斯督記」續々群書類從十二宗教部）にもこの種の資料を掲げてゐる。姉崎博士の「切支丹宗門の迫害と潜伏」はこの「契利斯督記」の外に「耶蘇教叢書」と云ふ題名に一括した故藤田季莊氏の寫本集を材料として居られるが此にも貴重な資料を含む。

此外、教義關係の寫本中、最も注目すべきものは、「伴天連記」と「妙貞問答」とであらう。

「伴天連記」は編者も編年も不明であるが慶長末頃に著はされたと推定され、禁教前に我國で作られ、我國に殘された稀有の南蠻文學の遺篇である。（續々群書類從十二及び海表叢書卷一に複刻）第一、七つのサカラメントの事（一—五）、第二、ルシヤ姬の話（五—九）、第三、伴天連ヘルナンドと乳母サビイナの物語（九—一四）、第四、シヤムロウ征伐の事（一四—一六）、第五、モンテフラタ征伐の事、日本教化の事（一六—二七）から成り、第二章の奥書に、この章がタウイン・ビセンテ（既出）の作なることを記してゐる。ビセンテの作「ルシヤ姬の話」は、構想の簡朴、

文章の馴雅、南蠻お伽草紙として可憐愛すべき小品である。第五章に見えるモンテ・フラタは、Monte Prata.（葡語）卽ち銀山であつて、日本近海にありと云はれた金銀島傳說は、南米エル・ドラド（El Dorado）の名と並んで、初期東航者の間に喧しかつたが、篇中モンテ・プラタへ乘り出す南蠻船難航の條は、慶長十六年（一六一一）西人ビスカイノ（Vizcaino）の日本近海に於る金銀島探險中の海難の史實を連想せしめる。

「妙貞問答」は不干ハビアンの著で、其原本は全三卷のうち上卷（排佛）を佚し、中卷（排儒、排神）と下卷（基督顯正）二卷のみが伊勢神宮文庫に藏せられ、日本古典全集第二回のうちに全文の複刻がある。著者ハビアンは初め加賀の禪僧であつたが轉宗して京都の南蠻寺に入り、慶長十年には本書を著はし翌年には同寺で松永貞德に案內された林道春と宗論を鬪はし本書をも示してゐる。南蠻本平家の編者として知られてゐるが、後年更に基教を棄て、元和六年には「破提宇子（デウス）」を刊行してゐる。東西宗教の智識と體驗とを兼ね備へたこの謂ゆる轉向家はそれを利用して、先にはデウスを顯はし、後にはデウスを破したのである。彼の宗論書二篇は、彼の奇怪な經歷と共に我國宗教思想史上に特異な資料を提供する。「破提宇子」に類する排耶書、反吉利支丹文獻では、古くは南蠻寺內でハビアンと論じた林羅山に「排耶蘇」（羅山文集卷五十六、慶長十一年）がある。葡人ヘレイラ Ferreira. 歸化名、澤野忠庵が寬永十三年に著はした「顯僞錄」一卷は注目すべきものである。彼は宣教師として在留中、天文學では天動說を述べた「乾坤辨說」の口述者として知られ、醫術では南蠻流外科の始祖と云はれ、其日本語學は太平記を讀み得たと云はれるが、後年基教を轉（ころ）んでこの破邪書を作したのである。「破提宇子」「顯僞錄」は共に古典全集（第二回）中に收められて居る。其他の排耶書には、寬永の「吉利支丹物語」、寬文の「破吉利支丹」、「吉利支丹退治物語」、「鬼利至端破却論傳」

等があり、幕末には種々の破邪書の翻刻編纂等が行はれたうちに、あの「南蠻寺興廢記」なども交つてゐる。佛徒儒者側からの基教排撃の事蹟に附ては私の「南蠻廣記」其他に譲るが、排耶の套語が長く行はれた一例として、俳壇でも延寶ごろ中島隨流が高政西鶴の一派を誹つて、伴天連高政とか阿蘭陀西鶴とか呼んだことを附記しておく。

四

前述の吉利支丹宗教文學と共に、所謂外道の書として彼等が編した文學書も亦南蠻文學の重要な一部門をなしてゐる。天草本「平家物語」「伊曾保物語」などその雄なるものである。「金句集」は和漢の金言名句を集めたものとして「精教精華」が歐西の聖語詞華を掲げたのと對比せらるべく、更に近年に至つては古今の名吟佳什を選んだ「倭漢朗詠集」までも發見されるに至つた。朗詠集は「太平記抜書」と共に國字本で、平家伊曾保金句集はローマ字綴り國語本、精教精華は拉丁語であつて何れも天下に唯一本の存在を知るのみである。

「平家物語」は古くサトウ卿の書志によつて知られ、私も明治四十二年大英博物館に於て見るを得た原本に附て其解題と編者ハビアンの考證を試み、大正三年その一部の翻字も試みたが、昭和二年には龜井高孝氏の全文翻刻が岩波書店から現はれた。原本は伊曾保金句集と合綴せられ、頁數を示す部分は五五四頁、そのうち伊曾保は九七頁、金句集は四十六頁、難句集四二頁である。標題には、「日本の言葉とイストリヤ（Historia. 歴史）を習ひ知らんと欲する人の爲に世話に和らげたる平家の物語」とある。允許文に次いで三部に對する總序があり、次に平家の編者ハビサンの

緒言がある。總序には次の如き言葉があつて三部の書の刊行の目的が知られる。

此の一卷には日本の平家といふイストリヤと、モラーレス・センテンサスと、エウローパのイソポのファブラスを押すものなり。しかればこれら作者はゼンチョにて、その題目もさのみ重々しからざる儀なりと見ゆるといへども、且つそは言葉稽古のため、且つそは世の得のため、此等の類（たぐひ）の書物を板に開くことはエクレシヤ（Ecclesia. 教會）に於て珍らしからざる儀なり。（下略）

緒言には、外人宣教師が「天の御法を說かんとするには、此の國の風俗を知り、又言葉を達すべきこと專ら」なること、「されば言葉を學びがてらに、日域の往事を弔ふべき書」として平家が最も適せること、「書物のごとくにせず兩人相對して雜談（ざふたん）をなすがごと」く形式を以て書いたことを記して居る。問答體は「世話に和らげたる」即ち俗語の使用、「雜談をなすが如」き、即ち口語體の使用と共に、南蠻文學の特色をなすものである。

平家が選ばれたのは、本書が當時廣く上下に愛誦せられてゐたといふ理由の外に、その底流をなす佛教の無常觀が、基教の現世厭離の觀念と一味相通じ、調和すべき或は利用すべき點があつたからであう。平家は琵琶法師によつて語られたが、吉利支丹の中にも、山口にダミアンなる法師がゐて、琵琶に托して教義を宣べたといふことが西教史にみえる。全卷を四分して、平家の先祖の系圖から始まり、大原御幸に次いで一門斷絕の章で終つてゐる。其編序は大抵流布本に一致してゐる。右馬之允、喜一撿挍ふたりの應答は輕妙を極め、當代の狂言でもきくやうである。

●「なう喜一、序（ついで）にその淸盛の事をも聞きたいよ。」「こなたさへ草臥れさせられずは、私はなんぼうなりとも語りまらせう」。

・一「ちつとも、そなたに只口はおかせまいぞ。なほ先へお語りあれ」一「さて〳〵いかい平家上戸でござる。」

・一「この茶を飲うで息をついで、まちつとお語りあれ。」一「は、これは添けない、冥加もないお茶でこそござれ。」

・「とてもの事に重衡が東下りの事をもお語りあれ。」一「こゝらはとつと面白い所でござる程に、ほん〳〵に節を附けて語りまらせう。」

の類である。序に第十二章から一部を引いてその口語化を偲ぶことにしよう。

小夜もやう〳〵更けゆけば、世間も打靜まつて、いとものあはれなに、重衡心を澄まいておぢやる折節、燈が消えたれば、これを御覽ぜられて、重衡、「燈暗うしては數行虞氏が涙、夜更けて四面に楚歌の聲」といふ朗詠をなくなくロずさまれた。（中略）。重衡心を澄まいて「やあ御前あまり面白いに何ぞま一度」とあつたれば、千手心を澄いて「一樹の陰に宿り一河の流れをくむも是れ前世の宿緣ぢや」といふ拍手をかへすまいたれば、（下略）

南蠻本平家は、一つの文學的製作では無かつたとは云へ、その行文俗語を用ゐながら卑俗に墮せず、その文詞自らペイソスにユーモアを加味して藝術的香氣を失はず、文章語の口語化及びローマ字綴による嚴密な寫音法に由つて當代の口語音口語法の研究資料を提供した事と、平家の諸異本に別の一本を加へた事は特記すべきであらう。

「平家」がこのやうな趣味と價値をもつてゐるに對して、南蠻本「太平記拔書」六卷は同じイストリヤではあつても、太平記の流布本其ものの拔萃であるから、文學的作品、國語資料としては何等特筆すべき資料を含まない。併し本書に用ゐられた活字は、「ぎや・ど・ぺかどる」と同型のものであるから、同一活字で以て時に遠西の教書を、時に本朝の史書を刷つた事は、書史學的にみて奇緣と云ふべく、本書の存在に由つて南蠻伴天連の徒も我國のイストリヤ

に接した事が察せられる。前掲のフェレイラが「太平記」を讀んだのも亦或はかゝる吉利支丹版を通じてではなかつたか。

「金句集」はバレト撰「聖教精華（フロスクリ）」Barreto. Flosculi ex Veteris, ac Novi Testamenti……と同工の詞華集（アンソロヂィ）であつて、前者が四書七書等から抄錄したに對し、後者は新舊兩聖書、希拉の名家、中世の學僧達の詞章から拔萃してゐる。「金句集」では其の錄する所、論語・三略を主として孟子・老子・淮南子等からも採られ、漢書・後漢書・北史等からも引かれ、詩經・五元燈・會元・無門關等からも擧げられてゐて其範圍は廣いが、此等は當時の金句集類本からの孫引であつたと思はれる。編纂の準據となつた資料其他に附ては土井忠生氏「天草本金句集考」に詳しい。今天草本伊曾保中にも用ゐられた金句から例文を擧げよう。

・國を亡ぼし家を破ることは人を失へばなり。

心。國を滅ぼし家を破ることはよい者を失ふ故ぢや。

・血を銜（ふく）んで人に吐けば、まづその口汚（けが）る。

心。人に仇（あだ）をなさぬ先（さき）に、まづわが身に仇をするものぢや。

・天に跼（せぐゝま）り、地に蹐（ぬきあし）す。

心。天をも地をもおそれよ。

金句集の全譯は、曾て木水彌三郎氏が試み私が檢閱中であつたが、幸にも吉田澄夫氏が昭和八年、國語教育の誌上

で完譯を達成せられた。

「聖教精華」には、希臘の詩家ホーマー、哲人プラトー、アリストートル、劇家ユーリピデス、史家ヘロドタス等の名が見え、羅馬の詩人ヴァージル、哲人セネカ、シセロ等も見える。かの遠西ルネサンスの尚古學風の反映が、この九州の一隅から出た小冊の裡にも幽かに影さすのである。嘗て明治卅九年一月早稻田文學誌上で坪内逍遙博士が我が「百合若物語」との關係を推考された「ユリシイズ」(Ulysses)の作者ホーマー(Homer)の名や、近くは昭和二年新潮社日本文學講座第十一卷で島津久基氏が我が「天狗の内裏」との類縁を考察された「イーネード」(Æneid)の作者ヴァージルの名が、かゝる文獻の上に見えてゐるのは、此ら二說の推考に一つの資料を與へるとおもふ。尚、吉利支丹版佚書の中に、ヴァージルの歐文書の存したことは既述のとほりである。フロスクリ上梓の翌年、慶長十一年の耶蘇會人員調書に由ると天正使節三人中の伊藤滿所は有馬學林に敎授を助けて居り、翌十二年には伊藤、中浦は有馬學林に、原は長崎に居たから、彼等にも本書は懷しまれたことと思ふ。

昭和五年四月木村毅氏に依つて「改造」誌上に發表されて始めて其存在が世に知られ、續いて同年六月土井忠生氏によつて採訪調査されたロレンソ文庫藏「倭漢朗詠集」に附ては、昭和六年二月「藝文」誌上に土井氏の精細な解題考證がある。同氏の研究によると、本書は廿八葉の小冊、美濃紙大の袋綴和裝本で可成使用されたらしい手摩れの跡ある水色無地の表紙が附いてゐる。内容は十七葉までが、朗詠の上卷、それに續いて、九相歌並序、無常、雜筆抄、實語敎、直實狀、返狀、義經申狀、玄宗皇帝外六人の勸學歌文の抄錄がある。「太平記拔書」と同じく、吉利支丹學

林内で使用された國語教科書であつたらう。氏が試みられた本書と本書の原資料乃至類本との對校に據ると、本書の辭句に興味ある改竄が行はれてゐる。「經盛返狀」のうち、「仰天伏地相待天道感應處七ケ日内得見彼死骸是併與天處也」の天道は、もと祈誓佛神となつて居り、天は佛神となつてゐるのを吉利支丹の立場から斯く改めたので、天道、天は當代吉利支丹用語としてデウス（天帝）を指したものであつた。私の寓目したところに依ると更に注意すべき改竄が「金句集」に見える。易經謙卦彖傳の「天道虧盈而益謙」を金句集では「鬼神は盈てるを虧いて謙るに幸ひす」と掲げ、その注に「天道はおごりを極むる者を下げさせられ」云々としたことである。吉利支丹版「朗詠集」は之を書史の上から見るも、「勸學文」に吉利支丹版刊行に先だつ慶長二年の勅版本の存する他、他の資料は此の吉利支丹版に依つて始めて活版印刷されたことは忘れるべからざる功績と思ふ。「うづみ火のしたにこがれし時よりもかくにくまるゝおりぞかなしき」といふやうな幽艶な王朝のしらべが、碧眼鴃舌の徒にも沈吟される機があつたかといふ空想は、われらの異國趣味をそゝらずにはおかぬ。

吉利支丹版文學書のうち、平家は原文の口語化に問答體を加味したものに過ぎず、太平記及び朗詠集は原典の再錄に過ぎぬに對し、伊曾保は一つの飜譯しかも最初の西洋文學の飜譯であるから、其の南蠻文學としての價値は前三書と比較ならぬほど高いと云はねばならぬ。天草本伊曾保に附ては古く明治二年七月九日の中外新聞に其紹介が現れてゐるが、サトウの書志に始めて纏つた解題があり、故上田氏も明治三十六年にはその講演「外國文學の研究」中に本書を紹介したり、明治四十三年十一月、精緻な「伊曾保物語考」（上田敏全集第六卷）を發表した他に、寛永和本系伊

會保の校勘本を出版せられんとした企てもあつた。私も明治四十三年其全文を翻字し翌年之に「西洋文學翻譯の嚆矢に」といふ小論を附して刊行し、更に昭和三年十月には之を修訂し關係諸論考を新增して「文祿舊譯天草本伊曾保物語」と題して上梓した。同年七月には伊曾保展覽會を京都に催したり、翌四年七月には天草本からの現代語譯をアルスの兒童文庫中の一冊に加へたりした他、其後も屢々伊曾保雜稿を發表して新資料の探訪紹介を試み、同じ岩波講座の世界文學にも「イソップ」の一文を草したりして、かの平家の喜一坊から、「さて〳〵きつい伊曾保上戸でござる」と笑はれ兼ねまいほどの愛着をもつてゐる。それらの詳細は私の諸稿に讓つて、こゝには本書の内容と其原本關係と我國文學に遺した痕跡の一端を要約するに止める。

南蠻本伊曾保は、「イソポが生涯の物語略」四章と「イソポが作り物語の抜書」上下二卷「狼と羊の譬の事」以下七十話から成つてゐる。伊曾保傳には、「之をマシモ・プラヌーデといふ人、希臘より拉丁に翻譯せられしもの也」と附記してゐる。「平家」よりは一層くだけた京阪地方の談話體口語文を用ゐ、その話題の多趣、文辭の簡朴輕妙、之を口語文學、お伽文學、寓話教訓文學として見るも優に我國近代文學中に傑出した作品たるを失はぬ。本書の語學的研究に附ては、春日政治氏の「國語史上の一劃期」（新潮社日本文學講座第十四卷第十八卷）や土井忠生氏の「天草本伊曾物語と方言」（方言第四卷一號）等に讓るが、用語は當代の京阪語に方言洋語をも混へ、語法は室町時代の口語體を傳へ、ローマ字式寫音法は當時の發音を審かにして、國語史資料としても價値は大きい。譯者は不明であるが、平家の口譯者ハビアンや、シュールハンマー氏のあげたヨーホー軒パウロ等が擬定せられ、又土井氏は天草本に九州方言の少くないことから推定して肥前生の邦人イルマン高井コスメの名をあげて居られる。「鹿と葡萄の事」といふ一話

を引いておく。

ある鹿、獵人より僅かに追はるゝによつてせん方なさにそのあたりな葡萄の蔓のうちへ身を隱いた。獵人その所を通れども、鹿を見つけいで行きすぎた。その鹿「あら、今は辛い命を助かつたものかな」と思うて首を差上げ、その葡萄の葉をくらうたが、その口音を獵人がきゝつけ怪しめて立返り、「さてはかの蔓の蔭に何ぞけだものの居るものよ」と見れば、右の鹿を見つけ、そのまゝ射て取るところに、鹿のいふは、「わが命を助けたこの蔓の葉をくらうた罰に、この科にあふぞ」というて死んだ。

下心。恩を讐をもつて報ずれば、天罰のがれずといふ義ぢや。

イソップ物語の源流研究に附ては、我國側では「伊曾保物語考」は最も貴重な業績であるが、古代印度の動物譬喩談が、紀元前五世紀ごろ釋尊の教化に利用されて「本生經」となり、これが西漸する途すがらには、アイソーポス即ちイソップの語原に關すともいふアイセーポスなる水神の棲む小亞細亞の河を涉り、いつしか希臘の民間喩言と合して紀元前三世紀ごろには所謂イソップ譬喩集となり、口傳に寫本に刊本に、歐洲の諸國に普く擴がり、やがて近世に入ると、その中の一本が南蠻船に載せられて印度洋の煙波を東へ回り、遂に絶東の島の浦わに漂ひついた遍歴の遙けさを偲ぶにつけても、是が教訓書であつたお蔭で嚴しい禁制の眼を逃れて、徳川時代の國文學にその系統が傳へられたのみならず、大和信濃の山里や佐渡の離れ島に迄も民譚のかたちで殘されたらしい事は我が伊曾保のために此の上もない幸運であつた。

吉利支丹版ローマ字本伊曾保の外に、徳川初期の漢字平假名本が殘つてゐて、いづれも同一系統の譯本であるが、

印刷様式の上からは、七種の異版をあげることが出來る。活字本六種と繪入整版本一種である。活字本には慶元頃と思はれる無刊記本五種と寛永十六年刊本一種とあり、整版本は萬治二年版であるが、何れも稀覯に屬する。尙德川初期寫本としては、佐々木信綱博士架藏の三種と、神宮文庫と鹿田松雲堂との藏本各一種合計五種が知られてゐる。

今此等の國字本とローマ字本とを比較すると、喩言の順序や數や文章の繁簡はもとより、其用語もローマ字は口語體を採り、國字本は文語體を用ゐて居る點から推察して、兩者は別系のものと見ることが出來る。然るにロドリゲースの日本文典に引用された伊曾保の辭句の中には、此等二系統以外の文語體のものを用ゐてゐる點があるから、旣に文祿以前に文語文に譯された原本とも云ふべきものが出來上つてゐて、それから一方天草版のローマ字口語本が作られ、他方國字文語本が作られたかも知れぬといふ假定を、私は嘗て「天草本伊曾保物語」の附錄中に試みて置いたが、此は興味ある研究題目だと思ふ。但、此等國字本のうち萬治版に大正十四年稀書複製會の模印本があり、文明源流叢書等にも複刻がある。

次に伊曾保物語の拔萃刊本では、元和頃の「戯言養氣集」中に「世を渡る肝要は眞僞の間のもちゐる其所を得るに有」と題して、烏と狐の話が使はれてゐる。萬治版伊曾保から三年經て出版された寛文二年版の曾我自休著「爲愚痴物語」卷五には「鼠ども集り談合評議の事」が引かれ挿畫もある。天保十五年版爲永春水著「繪入敎訓近道」といふ草双紙には伊曾保から十六話が藉られ、これにも歌川貞重の挿畫がある。尙古く水谷不倒氏がその著「列傳體小說史」（明治二十六年）中に、淺井了意の「浮世物語」（寛文十年）が伊曾保遍歷談に胚胎したらしいと推測せられたが、その當否は別として、了意は破邪書の編纂にも因緣あつた人だけに其の點との臆測は興味を引く。

イソップ物語が我國に入つた經路は以上の南蠻系統の外に、漢譯本と英譯本を通じてである。私は嘗て和蘭系統の一流がありさうなものと疑つておいたが、その痕跡は司馬江漢の「春波樓筆記」（文化八年）中に暗示のある他、譯本は世に現はれなかつた。しかし昭和三年始めて見る機を得た金澤の前田直行男所藏の蘭文古版繪入伊曾保の斷簡六枚は私の推考を確める一の資料と見られる。此は譯本では無く、一六一七年（元和三年）アムステルダム刊「動物公苑」と題するイソップの影模であるが其原本たる「動物公苑」が元祿以前から蘭人と交渉あつた前田侯宗家の手に入つたので無かつたかと想像されるのである。この斷簡についての考證は近著「典籍散語」に收めておいた。

漢譯本にも二種あつて、一は舊代南蠻系統のもの、一は新代英文系統のものである。前者は、明の天啓五年（寛永二年、一六二五年）の「況義」、後者は約二世紀後の、清の道光廿年（天保十一年、一八四〇年）の「意拾喩言」である。「況義」は寛永七年の禁書目にも掲げられ、三浦梅園の「五月雨抄」にも禁書として錄してあるから、寛永初頃我國にも渡つたかと思はれるけれども全く殘つて居ない。巴里の國民文庫にその寫本が僅か二部存するのを先年私は筆寫して紹介しておいた。舊教徒トリゴー（Trigault）漢名金尼閣の譯である。「意拾喩言」は新教徒ロバート・トーム（R. Thom）の譯で、嘉永安政年間我國にも傳はり、漢學者や志士の間にも愛讀せられ、南蠻本とは違つた意味の感化を幕末の我國思想界の一部に與へたらしく思はれる。即ち警世の書として讀まれたことは、故岡崎桂一郎博士舊藏「伊娑菩喩言」の跋文として安政四年十一月吉田松陰が記した慷慨の文辭によつて察せられ、イソップを時世諷刺に用ゐた佛蘭西の詩家、ラ・フォンテーヌの先例を連想させるものがある。

英譯本で最も有名なのは明治五年乃至八年版の渡邊温譯「通俗伊蘇普物語」六冊であるが、其以後の英譯本に至つ

ては枚擧に暇がない。

南蠻伴天連たちは内典としては聖書に次いで廣く讀まれたと云ふイミクシオ・クリスチを、外典としては、イソップを譯したが、舊教徒の宗敵とも云ふべき彼のルーターも亦、イソップを譯して聖書に次ぐ良書として自らその譯筆をも執つたといふ事實は、伊曾保物語の價値の超宗派的なることを示すと共に、かゝる二大良書が三百年の昔吉利支丹の手に依つて我國に傳へられた勞は忘るべからざるものであらう。

五

南蠻文學として編まれたものでは無いが、今は佚した南蠻文學の存在を覗ふべき資料や、歐洲古典の斷片零語を多く載せた語學書は、文祿三年のアルヴァレース式拉丁文典と慶長八年の日葡辭典と慶長九年乃至十三年のロドリゲース編日本文典とがある。今、ロドリゲースの日本文典について其引用文例の一端を示すと、伊勢・源氏・平家・太平記もあり、古今集・朗詠・謠曲、佛書から狂歌、連歌、小唄にまで及んで居る。語例は貴賤都鄙を問はずあらゆる方面を網羅して、京阪地方の標準的俗語と九州の一般的方言とを區別し關東中國地方の方言的特徴をも自覺した外、婦人語、詩歌語、佛教語、學問語の別を設け、寫音法はローマ字綴を利用して簡潔な規定の下に行はれた。アルヴァレース式歐洲古典的文典からの引用の多いことは「聖教精華（フロスクリ）」の場合と同じく、殊に拉丁からの引用が多い。「天狗の内裏」の原本と擬定されたヴァージルの「イーニード」からの拔萃も見える。南蠻文書の古佚書と思はれる書名は、

アルヴァレースには客物語、モルテ（死神）物語の二つが引かれ、ロドリゲースには、右二つの物語以外に、教化物語、左近物語、黒船物語、豊後物語、加津佐物語、縁邊物語、客人物語、醫者物語、その外單に物語とよび、又元宋などの書名が見える。ヨーホー軒パウロなどの吉利支丹文學者が作つたものであらう。大方は九州邊の吉利支丹物語に材を取つた口語文であつて、その斷章は私の「南蠻更紗」中に收めておいたから、今はその二三を擧げるに止どめる。

・宗麟さまの上に禪法を以て何事ぞおよろこびの出來まらしたことござるか。（豐後物語）
・今よりエウロウパのお形儀にうらはら違うたことばかりを御覽ぜられらず。（加津佐物語）
・ヤラヤラ目出たや、南蠻船が着きまらした。（物語）
・そもそも一物無き所に種子ならして諸々の天、そのうちに世界森羅萬象を出現させられた。（ぐわんらい）
・一段めづらしいゐのこ、毛長う雪の如く白う、目黒う、顏いかにも愛らしいを呉れた。（黒船物語）

「元來」は舊約創世記を物語にしたものらしく、これには文語も交つてゐる。徳川本ドチリナ・キリシタン第一頁に「一つには一物もなき所に様なくして天地萬象を作りあらせ給ひ」と見える如き語句の類似もある。ゐのこの章は何やら南蠻渡りの名犬を空想させる。南蠻船のことも多く出てゐる。わづかに遺された斷片からも私らの異國趣味を刺激する此ら地方色ゆたかな物語は、伊曾保やコリヤードの懺悔錄と共に、室町末狂言類や抄物類程度の口語文學しか有しなかつた時代に、かゝる新文學形式への試みを敢行した點、近代國文學の發達を論ずる者にとつて觀過しがたいものがあらう。

紙面の都合上、吉利支丹版「落葉集」や此等語學書の書志的説明については、岡本良知氏譯ワレイタス著「初期耶蘇教徒編日本語學書研究」や私の舊稿にゆづらねばならぬ。

六

私は前章まで南蠻文學の諸部面について概説し來つたが、最後に謂ゆる南蠻情趣豐かな文學資料の三門を擧げておかう。

十六世紀の海洋詩人、多感不遇の漂泊詩人、葡國のホーマーでありヴァージルであつたカモエンス（一五二四—一五八〇年、大永四—天正八年）Luis de Camões が、竄流の身を以て臥亞を經て澳門まで來た波瀾重疊の生涯、又ヴァスコ・ダ・ガマの偉業を讃へ祖國の意氣を歌つた彼の大敍事詩「ルシアダス」（Os Lusiadas）、（一五七二年、元龜三年初刊）並びにそれと我が「百合若」傳説との關係に附ては、既に私も舊稿「南風」に敍しておいたが、この名詩第十歌にうたはれた日本を紹介しよう。舊い拙稿を掲げると、

島の國こそ好く見つべけれ、
天地の惠み豐に足らひ
花も實も千々に香れる。
見よや、日本を、廣き地球の

北の面低う國土位す、
東の境を海原周らし。
偉なる哉ガマ、爾が勞の
結果は其土に燦然たらむ。
天の御法に異端の滓渣(けがれ)を
鑛(あらがね)錬るごと除きし棄てば
銀の壙(まぶ)皓々たらむ。

なほ岡本氏の新譯もあるが略する。末節には基教布教の事を織り込み、モンテ・プラタの傳説をも仄めかす歌ひさまでである。天正使節らは、濱田博士の譯著に由ると、その歸途葡國コイムブラ滯在中に、カモエンスが「ルシアダス」に歌つたイネス・デ・カストロの悲しい死を遂げた愛の泉一名涙の泉と、彼女のなきがらを葬つたサンタ・クララ僧院を訪れて、その詩中第三歌なる、

見よ、彼處の花の間に流るゝ淸き泉を、
涙はその水、「愛(アモーレス)」はその名なり。

の哀調を偲んだといふ。因みに彼等が歐洲巡禮の記錄として有名なグワルチェーリ (Gualtieri) の「日本使節記」(一五八六年、天正十四年刊)の卷頭には「日本使節の恙なく故國に到り着かんことを祈りて」と題するカルガ(Carga)の歌へる送別の拉丁詩一篇がある。濱田氏の著から邦譯を拜借しよう。

嘗ては旅路はるけき印度より、こゝらの寶を御身が爲に齎らせし帝王幼主はた上帝に、あゝ我が悲性よ、その歸路恙なきを得しめしからは、（中略）

來りて三つの王國を汝が爲に齎らせるマンショと其の勇しき輩に、淸き御恵もて恙なく父母の家居に歸り著かんことを許し給へ。

彼等が樂しき日本の渚に、はた信仰深き豐後の王の許に、たゞ到り歸らしめ給へ。——譽あるかの國民に、拉丁の法を今や傳へんとする彼等青年をして。（下略）

元祿の「松の葉」には「昔より今にわたりくる黑船、緣がつくれば鱶の餌となる、さんたまりや」の哀切な南蠻ぶりがあつて、黑船の水泡のあとに盡きぬ名殘が惜まれるが、その拉丁詩には「出ぶねの酒をすごせ道づれ。らべいか(Rabec. 葡語、絃器)で名殘を惜む歌もあり。」（俳諧當世男）のしみ〴〵した離情は缺くと云へ、蒼波五千里の歸途を前に送る者送らるゝ者の感慨を背景として誦する時、正に好箇の南蠻詩たるを失はぬ。

船の序に、九州浦上外海(そとめ)地方の舊信徒に口傳された次のやうな祈禱や俚唄は、三重地方に遺つたさゝら節と共に南情趣ゆたかたものである。

• 此の船サン・ノレンゾ様のござ船にて、だんぶ、がんかん穩かにもとのだんかんに、御(かん)着け給ふやうに賴み奉る。

（船出の時）

・沖に見えるはパーパの船よ、丸にやの字が書いてある。

サン・ノレンゾはロレンゾの誤傳、パーパは法皇(ポープ)、而して丸にやは聖母マリヤであらうとも云はれてをる。

・われは十七、
わかい身なれど、旅も都もまだ見ず、
おやのかんどは、なほつても、
その身は、みやこまゐりは、せうずもの、(中略)
奈良を出てから、堺つきそよ、
堺港にかゝるお船は、
なんばん船とは、あれエかの。(下略)(志摩、さゝら節)

黑舟や南蠻船をうたひ海洋趣味にも倫れた俳句は古俳書類にも種々みえるが、貞室の正章千句(慶安元年刊)にある、

かたきもつ身のなど弓斷なる
黑船はゑげれす舟のあひ近み
俄に風のかはる洋中
みんなみの空に陰氣な雲たちて
覆ひきざるや補陀樂の山

の如きは慶元のころ南島東海に於る各國角逐爭覇の狀を寫しえて躍如たるものがあり、西武の鷹筑波（寛永十五年版）にある次の連句と共に、貿易史料としても、我國に乏しい海洋詩の斷章としても價値があらう。

すはや、かたきとさわぐ船中
　ひつくはへ矢をいぎりすやこはからん

尙、貞德の紅梅千句（明曆元年刊）に見える次の倭寇の句は此等と對照して興が深い。

からの騎に新羅の絹を盜みかへ
　ばはんどうしも心ゆるさず
嗜ておく石火矢のたまぐすり

南蠻人によつて歌はれた日本讚美としては、葡國のカモエンスに對して、イスパニヤの詩家ローペ・デ・ベガ（Lope de Vega)（一五六二―一六三五）の「日本に於る信仰の凱歌」(Triunfo de la fe en el Japon)（一六一八年マドリ刊）と題する殉教史話をも擧げねばならぬ。西班牙語の詩のほか拉丁詩もある。この他クヴルチェリの天正使節記の首にも讚詩がみえる。木下杢太郎氏の適譯によつて愛誦される。また幸田成友博士が近き時に、その著和蘭雜話に於て紹介された「悲劇アゴスチーノ攝津守殿の筋書」によつて知られる小西行長の悲劇（一六〇七年興行）の如きも珍奇な遺篇であるし、二十世紀の作品であるが、一九〇六年バルセロナ版で細川忠興夫人ガラシヤを題材にした小說のごときも擧げられよう。我國にてガラシヤに關する明治三十年以降にあらはれた戲曲小說の類と共に併せて興味が多

い。高山右近については、米國で十九世紀の中葉に於て右近を讃美した史話めいた凡作も出た。

フロイスの日本史には吉利支丹達がナタル (Natal) 即ちクリスマスの祝歌をうたつた記述があるが、その辭句は知られない。故和田萬吉博士譯モンタヌス (Montanus) 著「日本誌」には降誕祭や復活祭の行列にうたつたといふ吉利支丹歌の斷章が載つてゐる。

マリヤよ、汝が行きし時
　汝が思寄りしことと見たるものとを語り給へや。
彼等はわが主をばうばひ去れり、
　故にわれは悲みにたえず、失神して臥せり。

九州高島の潜伏信徒口傳の御降誕の晩の祈、

ベレンの國にお生れなさつた御若君様、今はいづこに在しますか、御讃(は)め尊め給へ。

は、その語調に舊代の祈禱の餘韻がこもつて、うひうひしい詩情に充ちてゐる。慶長七年頃長崎の子供らは街上にデウスの教の歌をうたふ慣はしを作つたといふが、この祈禱を誦すると、何やら其子供らの優しい吉利支丹歌を聞く想ひがする。

參らうや〳〵、パライソの寺に參らうや、パライソの寺とは申すれど、廣い寺とは申すれど、狹い廣いは我胸にあり。

パライソは Paraiso. 即ちパラダイスであるが、これは九州生月島に傳はつた唄で寛永初年ごろの殉教者の作であ

るといはれる。迫害に對する悲壯な覺悟が言外に溢れてゐる。尚、吉利支丹迫害、それに對する轉宗を題材にしたものが古俳書類、例へば望一の望一千句（寛永七年）、維舟の犬子集（寛永八年）、西武の鷹筑波（前出）、貞德の油糟（寛永廿年）、下つては其角の誰が家（元祿三年）等に散見する。吉利支丹大名小西行長の最期を想起させるやうな一例を、油糟から擧げる。

　　とても死なばいかでか腹を切らざらん
江戸ぜめにあふ武士のでいうす

貞德の句にも島原亂に關したのがある。これ等の俳書にあげられたものも、何れも貞門一流の奇趣を追ふ浮薄な調子で吉利支丹自らの情熱も體驗もないだけに宗教詩としては胸に迫るものは全く無い。古俳書に現はれた南蠻趣味については、小泉迂外、宮武外骨、頴原退藏諸氏の發表や私の「異國情趣集」に譲る。

散文の方では、貞德が慶安三年頃著した「貞德文集」や、慶安五年頃刊した「慰草」に南蠻の香りの濃い章句が交つてゐる。寛文十二年刊「徒然草嫌評判」は「慰草」と同じく徒然草の批評であるが是にも異國のにほひが漂うてゐる。私が「海表叢書」に收錄した元和四年池田好運の自序ある「元和航海記」や、寛文十一年川淵久左衛門の識といふ奥書のある「呂宋覺書」、其他通航一覽收載の天竺德兵衛の渡天記等の航海記類は、交通史料たると共に海洋趣味と南蠻情趣をも含んでゐる。長崎平戸あたりに遺されたじやがたら文には青々望鄕の愁思がこもり、今大英博物館に存してゐる日本婦人の假名消息には、句々哀慕の紅涙がにじむ。この平戸商館の英人たちに宛てた書簡類十八通につい

ては史學雜誌卷十四の九に村上博士の發表があつた。書翰といへば、かの九州少年使節達が在歐中、諸官廳に宛てた公文書の中には短い禮狀など交つてゐて、例へば「此井村（伊國 Imola）罷通候處、在所之諸人御懇不及申候」云々（史學雜誌第十二編四號村上博士、いもら文書）といふやうな巧まない文辭は、かへつて私らに彼等のうい〳〵旅姿を空想さゝずにはおかぬ。それらをも南蠻書翰文學に加へたい心持がする。

最後に、ユリシイズと百合若物語や、イーニイドと天狗の內裏の關係など、既に學界に興味ある問題を提供してゐる此等の題目に就ても記すべきであるが、紙面の都合上、明治以後に於る南蠻文學の影響に就ての考察と共に、別の機會にゆづり茲には割愛する。

結　語

結語として一言すれば、南蠻文學少くとも吉利支丹文學、それに伊曾保物語をも當然加へることにして、この特殊の文學は、そのころの日本文學史上に、よしや純粹の國文學との交渉やそれへの影響が有るか無きかに過ぎぬ淡々しいものであつたにしても、それを全然閑却すべきものではなく、いな寧ろ異色ある新文學として特筆すべきものであることを力說したさに、贅語を盡くしたのである。岩波講座中の「日本文學」講座中の拙稿たる南蠻文學研究の一篇と對照せられんことを希ふ。

昭和十年二月九日印刷
昭和十年二月十四日發行
昭和十年五月一日第二刷發行

岩波講座 日本歴史
第十七回配本 五

編輯者 國史研究會同人代表 黒板勝美
東京市神田區一ツ橋
印刷兼發行者 岩波茂雄
東京市神田區美土代町
印刷所 三秀舍

寺島製本